

殷末曆譜の復元

落 合 淳 思

序

曆譜の復元は古代史の重要なテーマの一つである。殷後期の同時代史料である甲骨文には年次の記述がほとんどないため、曆譜復元には、月次と干支を含む周祭の記述が利用される。

甲骨文に基づく具体的な殷曆を扱った最も古い研究は董作賓『殷曆譜』（中央研究院歷史語言研究所、一九四五年）であり、島邦男『殷墟卜辞研究』（弘前大学文理學中国研究会、一九五八年）は、より多くの材料を集めることで正確な曆譜の復元を試みた。しかし、この両者には想定する曆法に根本的な誤りがあり、曆譜復元に成功しているとは言えない。その後は殷曆の部分的な研究に限られており、総合的な研究はほとんど行われておらず、『殷曆譜』『殷墟卜辞研究』の誤りが現在まで改められていないことは、この分野の停滞を示していると言えよう。

本稿は、殷末曆譜に関する諸々の問題を整理するとともに従来説の誤りを訂正し、それに基づき殷末曆譜の復元を試みる。

なお、曆譜復元には『甲骨文合集（合集）』『甲骨文合集補編（合補）』『英国所藏甲骨文字（英国）』のうち、拓本が存在するものを対象とし、^① 摸本しか残っていないものは真贋および釈字に信頼性がないため対象としない。また、

重複している片については一方のみを載せた。

第一章 殷末の暦法

一、暦譜復元の可能範囲

暦譜の復元は、史料中の記時（時間に関する記述）を元に、各王の即位年数を確定するとともに実際に用いられていた暦を復元し、史料中の各記述がどの王の何年何月にあたるのかを対応できるようにする作業である。

元となる史料に年次が直接に記されていない場合、暦譜の復元には二つの要素が必要になる。一つは、各年次ごとの暦譜上の特徴であり、年次ごとの特徴がない場合には個々の記述が複数の年次に当てはめることが可能になるので、暦譜の復元が完整されない。もう一つは史料内部に年次を特定できる記述がある程度存在することであり、例えば、記時が日付などの小さい範囲に限られている場合には、史料内部で単一年次への対応ができず、暦譜復元は困難となる。

甲骨文については、第一期・一二間期・第三期は記時には月次・干支しか記されないため、年次ごとの特徴は判別できず、また即位年数を明らかにすることができない。そのため記時と年次との対応は不可能であり、暦譜の復元には至り得ない。

一方、第二期・第五期には詳細な記時を伴う周祭が見える。周祭は月次・干支・祭祀種類・祭祀対象が記されるため、暦譜復元を可能とするものである。ただし、第二期には年次の記述が全くないために暦譜復元が困難であり、第五期のみを暦譜復元の対象とする。

なお、本稿では拙著『殷王世系研究』（立命館東洋史学会、二〇〇二年）の成果に従い、第五期を文武丁・帝辛と

する(表1)。これは従來說(表2)とは異なるが、いずれにしても第五期は二世代二王である。

表1 『殷王世系研究』の成果による後期殷王世系

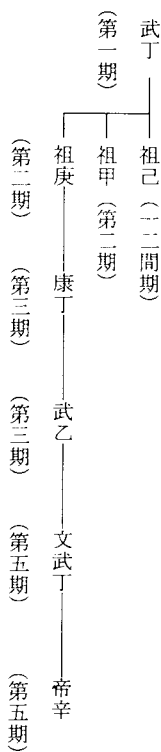
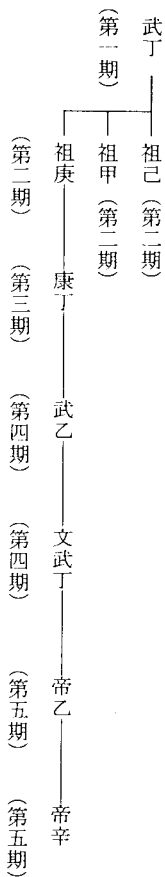


表2 従來說による後期殷王世系



*『殷墟卜辞研究』による。『殷曆譜』は『史記』に従い祖己を省いて廩辛を第三期とする。

二、曆の種類と置閏

曆には大きく分けて太陽曆・太陰曆・太陰太陽曆の三種類が存在する。現在広く用いられている太陽曆は地球の公転周期を基準とするものであり、一年を約三六五日(「太陽年」と呼称する)とする。イスラム曆が用いている太陰曆は月齢を基準とし、約二九・五日(朔望月)を一ヶ月とする。太陰曆は朔望月十二ヶ月を一年とするので一年は約

三五四日であり、太陽年とは一年に約十一日のずれが生じるが、これは簡単に言えば月次が気候の変化からずれて早まってくるのであり、季節ごとに気候が異なる地域には不便である。

このずれを修正するために前近代の中国などで用いられていたのが、閏月を置く太陰太陽暦であり、太陰暦と太陽暦とのずれは一年で約十一日なので、三十二ヶ月（三年弱）に一回程度の割合で閏月を設置する暦法である。置閏の方法には二通りがあり、一つは年末に閏月を置く方法（年末置閏）であり、もう一つは月齢観測に応じて年内のどこかに閏月を置く方法（年中置閏）である。第一～三期の甲骨文および西周金文には年末置閏であることを示す「十三月」が見える。

三、従來說における暦法上の不備

暦は周期時間を表示するものであるから、一定時間を判断できる基準が必要であり、一般的には太陽・月の観測が用いられ、やや特異な例では『左伝』などの文献に見える歳星（木星）のような例もあるが、いずれにしても地上での観測により一定の周期時間を計ることができるものは天体だけである。

しかし、従來說はこの原則に反する殷暦復元を行っている。

『殷墟卜辞研究』は数片を余してほとんどの記時が暦譜に収まるような復元を行っているが、一年に一度程度の割合で月末に「閏旬」を余分に置いたり、逆に一旬少ない月を設ける暦法を想定している（表3参照）。数字上の操作は可能であるが、月次は月齢に対応しているのであるから、月齢十日や二十日を月の初めとするという不自然な暦法となるので、月齢に対して日あるいは旬単位での操作は想定すべきではない。また、『研究』は帝辛代を第二・四・十一祀を除いて一年を三七〇日とし、一ヶ月を三十または四十日とするが、観測可能な天体からは、いずれの数値も導き出せないであり、これも暦が観測に基づき決定されるという前提を無視するものである。

『研究』帝辛1祀

月	干支	周祭
7	01甲子	
8	11甲戌	祭1旬
8	21甲申	祭2旬
8	31甲午	祭3旬
9	41甲辰	祭4旬
9	51甲寅	祭5旬
9	01甲子	祭6旬
10	11甲戌	祭7旬
10	21甲申	祭8旬
10	31甲午	祭9旬
10	41甲辰	祭10旬
11	51甲寅	祭11旬
11	01甲子	𠄎11旬
11	11甲戌	𠄎1旬
12	21甲申	𠄎2旬
12	31甲午	𠄎3旬
12	41甲辰	𠄎4旬
1	51甲寅	𠄎5旬
1	01甲子	𠄎6旬
1	11甲戌	𠄎7旬
2	21甲申	𠄎8旬
2	31甲午	𠄎9旬
2	41甲辰	𠄎10旬
3	51甲寅	𠄎11旬
3	01甲子	
3	11甲戌	
4	21甲申	翌1旬
4	31甲午	翌2旬
4	41甲辰	翌3旬
5	51甲寅	翌4旬
5	01甲子	翌5旬
5	11甲戌	翌6旬
6	21甲申	翌7旬
6	31甲午	翌8旬
6	41甲辰	翌9旬
7	51甲寅	翌10旬
7	01甲子	翌11旬

『研究』帝辛2祀

月	干支	周祭
7	11甲戌	
8	21甲申	祭1旬
8	31甲午	祭2旬
8	41甲辰	祭3旬
9	51甲寅	祭4旬
9	01甲子	祭5旬
9	11甲戌	祭6旬
10	21甲申	祭7旬
10	31甲午	祭8旬
10	41甲辰	祭9旬
11	51甲寅	祭10旬
11	01甲子	祭11旬
11	11甲戌	𠄎11旬
12	21甲申	𠄎1旬
12	31甲午	𠄎2旬
12	41甲辰	𠄎3旬
1	51甲寅	𠄎4旬
1	01甲子	𠄎5旬
1	11甲戌	𠄎6旬
2	21甲申	𠄎7旬
2	31甲午	𠄎8旬
2	41甲辰	𠄎9旬
3	51甲寅	𠄎10旬
3	01甲子	𠄎11旬
3	11甲戌	
4	21甲申	
4	31甲午	翌1旬
4	41甲辰	翌2旬
5	51甲寅	翌3旬
5	01甲子	翌4旬
5	11甲戌	翌5旬
6	21甲申	翌6旬
6	31甲午	翌7旬
6	41甲辰	翌8旬
7	51甲寅	翌9旬
7	01甲子	翌10旬
7	11甲戌	翌11旬

『研究』帝辛3祀

月	干支	周祭
8	21甲申	祭1旬
8	31甲午	祭2旬
8	41甲辰	祭3旬
9	51甲寅	祭4旬
9	01甲子	祭5旬
9	11甲戌	祭6旬
10	21甲申	祭7旬
10	31甲午	祭8旬
10	41甲辰	祭9旬
10	51甲寅	祭10旬
11	01甲子	祭11旬
11	11甲戌	𠄎11旬
11	21甲申	𠄎1旬
12	31甲午	𠄎2旬
12	41甲辰	𠄎3旬
12	51甲寅	𠄎4旬
1	01甲子	𠄎5旬
1	11甲戌	𠄎6旬
1	21甲申	𠄎7旬
2	31甲午	𠄎8旬
2	41甲辰	𠄎9旬
2	51甲寅	𠄎10旬
3	01甲子	𠄎11旬
3	11甲戌	
3	21甲申	
4	31甲午	翌1旬
4	41甲辰	翌2旬
4	51甲寅	翌3旬
5	01甲子	翌4旬
5	11甲戌	翌5旬
5	21甲申	翌6旬
6	31甲午	翌7旬
6	41甲辰	翌8旬
6	51甲寅	翌9旬
7	01甲子	翌10旬
7	11甲戌	翌11旬

表3 『殷墟卜辞研究』の暦譜復元

『研究』帝乙1祀

月	干支	周祭
10	01甲子	
11	11甲戌	祭1旬
11	21甲申	祭2旬
11	31甲午	祭3旬
⑫	41甲辰	祭4旬
⑫	51甲寅	祭5旬
1	01甲子	祭6旬
1	11甲戌	祭7旬
1	21甲申	祭8旬
2	31甲午	祭9旬
2	41甲辰	祭10旬
2	51甲寅	祭11旬
3	01甲子	飪11旬
3	11甲戌	飪11旬
3	21甲申	𠄎1旬
4	31甲午	𠄎2旬
4	41甲辰	𠄎3旬
4	51甲寅	𠄎4旬
5	01甲子	𠄎5旬
5	11甲戌	𠄎6旬
5	21甲申	𠄎7旬
6	31甲午	𠄎8旬
6	41甲辰	𠄎9旬
6	51甲寅	𠄎10旬
7	01甲子	𠄎11旬
7	11甲戌	
7	21甲申	翌1旬
8	31甲午	翌2旬
8	41甲辰	翌3旬
8	51甲寅	翌4旬
9	01甲子	翌5旬
9	11甲戌	翌6旬
9	21甲申	翌7旬
10	31甲午	翌8旬
10	41甲辰	翌9旬
10	51甲寅	翌10旬
11	01甲子	翌11旬

『研究』帝乙2祀

月	干支	周祭
11	11甲戌	祭1旬
11	21甲申	祭2旬
⑫	31甲午	祭3旬
⑫	41甲辰	祭4旬
1	51甲寅	祭5旬
1	01甲子	祭6旬
1	11甲戌	祭7旬
2	21甲申	祭8旬
2	31甲午	祭9旬
2	41甲辰	祭10旬
3	51甲寅	祭11旬
3	01甲子	飪11旬
3	11甲戌	飪11旬
4	21甲申	𠄎1旬
4	31甲午	𠄎2旬
4	41甲辰	𠄎3旬
5	51甲寅	𠄎4旬
5	01甲子	𠄎5旬
5	11甲戌	𠄎6旬
6	21甲申	𠄎7旬
6	31甲午	𠄎8旬
6	41甲辰	𠄎9旬
7	51甲寅	𠄎10旬
7	01甲子	𠄎11旬
7	11甲戌	
8	21甲申	翌1旬
8	31甲午	翌2旬
8	41甲辰	翌3旬
9	51甲寅	翌4旬
9	01甲子	翌5旬
9	11甲戌	翌6旬
10	21甲申	翌7旬
10	31甲午	翌8旬
10	41甲辰	翌9旬
11	51甲寅	翌10旬
11	01甲子	翌11旬

『研究』帝乙3祀

月	干支	周祭
11	11甲戌	
12	21甲申	祭1旬
12	31甲午	祭2旬
12	41甲辰	祭3旬
1	51甲寅	祭4旬
1	01甲子	祭5旬
1	11甲戌	祭6旬
2	21甲申	祭7旬
2	31甲午	祭8旬
2	41甲辰	祭9旬
3	51甲寅	祭10旬
3	01甲子	祭11旬
3	11甲戌	飪11旬
4	21甲申	飪11旬
4	31甲午	𠄎1旬
4	41甲辰	𠄎2旬
5	51甲寅	𠄎3旬
5	01甲子	𠄎4旬
5	11甲戌	𠄎5旬
6	21甲申	𠄎6旬
6	31甲午	𠄎7旬
6	41甲辰	𠄎8旬
7	51甲寅	𠄎9旬
7	01甲子	𠄎10旬
7	11甲戌	𠄎11旬
8	21甲申	
8	31甲午	翌1旬
8	41甲辰	翌2旬
9	51甲寅	翌3旬
9	01甲子	翌4旬
9	11甲戌	翌5旬
10	21甲申	翌6旬
10	31甲午	翌7旬
10	41甲辰	翌8旬
⑪	51甲寅	翌9旬
⑪	01甲子	翌10旬
12	11甲戌	翌11旬

*『殷墟卜辞研究』は2旬の小月(丸数字)、および4旬の大月(太字)を想定する

『殷曆譜』も同様であり、周祭周期に三十五く三十九句までの幅を持たせ、第五期を全体で八十七年とし、三十五句を二十四年、三十六句を三十六年、三十七句を二十三年、三十八句を二年、三十九句を二年としているが、やはり天体観測からは導き出せない数値である。

また、『殷墟卜辞研究』は、幾つかの論拠を挙げて甲骨文では全ての時期で太陽暦に対して月次が移動していると^②するが、「十三月」は太陰太陽暦によつて発生する閏月であるから、少なくとも「十三月」が見られる第一期から第三期までについては太陰太陽暦であることは疑いない（第五期については後述する）。

四、周祭について

周祭とは、**多・翌・祭・飠・𠂔**の五種類の祭祀（五種祭祀^③）を先王の即位順に従つて行う体系の祭祀である。各祭祀の順序は、**多**がひと通り行われた後で**翌**が行われ、**翌**の後には**祭・飠・𠂔**の三種の祭祀が一句ずつずらして行われ、これらが終わると再び**多**が行われる（次表参照）。第五期では各祭祀の期間は十一句、祭祀に先立って行われる「工典」を合わせると十二句とされており（詳しくは後述）、合計は約一年であり、第五期には年が「祀」と呼ばれ、十年日であれば「佳れ王の十祀」のように記される。

五種祭祀の順序

多	十一句	翌	十一句	祭	十一句	飠	十一句	𠂔	十一句
---	-----	---	-----	---	-----	---	-----	---	-----

表4—1 拙著『殷王世系研究』に基づく第五期周祭配序

	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
1旬	上甲	上乙	上丙	上丁					示壬	示癸
2旬		大乙		大丁			示壬妣庚			
3旬	大甲 示癸妣甲		卜丙 大乙妣丙		大丁妣戊		大庚	大甲妣辛	大庚妣壬	
4旬	小甲				大戊	呂己			大戊妣壬	
5旬				中丁					下壬	中丁妣癸
6旬	夔甲	祖乙				祖乙妣己	祖乙妣庚	祖辛		
7旬	光甲 祖辛妣甲			祖丁		祖丁妣己	南庚			
8旬	象甲						般庚	小辛		
9旬		小乙		武丁		祖己	祖庚 小乙妣庚	武丁妣辛		武丁妣癸
10旬	祖甲			康丁	祖甲妣戊			康丁妣辛		
11旬		武乙		文武丁						

殷末曆譜の復元

表4—2 (参考) 従来説の周祭配序(島邦男『殷墟卜辞研究』101頁)

	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
1旬	上典									
2旬	上甲	報乙	報丙	報丁					示壬	示癸
3旬		大乙		大丁			示壬妣庚			
4旬	大甲 示癸妣甲		卜丙 大乙妣丙		大丁妣戊		大庚	大甲妣辛	大庚妣壬	
5旬	小甲				大戊	呂己			大戊妣壬	
6旬				中丁		中丁妣己			下壬	中丁妣癸
7旬	夔甲	祖乙				祖乙妣己		祖辛	祖辛妣壬	
8旬	沃甲 祖辛妣甲			祖丁		祖丁妣己	南庚 祖辛妣庚 祖丁妣庚			
9旬	象甲 祖丁妣甲						盤庚	小辛		
10旬		小乙		武丁		祖己 小乙妣己	祖庚 小乙妣庚	武丁妣辛		武丁妣癸
11旬	祖甲			康丁	武丁妣戊 祖甲妣戊			康丁妣辛		
12旬		武乙		文武丁	武乙妣戊					文武丁妣癸

四一

第五期の祭祀順は表4の通りである。従来説では先妣祭祀に誤刻があることが考慮されていないため、先妣の数が多く見られていたが、拙著『殷王世系研究』で明らかにしたように、第五期には祖乙・武丁が二配妣ある他は、一直系王につき一配妣である。また、金文を元に従来武乙の配妣とされていた妣戊は甲骨文祭祀には見えない。ただし、本稿では補正された祀序表を用い

るが、先王の祀序については従来説と同じであり、第五期の配祀祭祀には年月次が併記されないもので、どちらを用いても殷末暦の復元に大きな支障はない。

五、第五期周祭の月次に対する移動

第五期の周祭はほぼ一年をかけて周期的に行われる祭祀体系であるが、月次と祭祀との明確な対応関係は見られない。これは、周祭の期間と一月と十二月の期間が異なるために、祭祀が月次に対してずれていくためである。前後どちらにずれるのかについては、第五期暦譜の復元を行ってみると判ることだが、月次に対して少しずつ（年に一句程度）周祭が遅れていく。言い換えれば、暦上の一月と十二月よりも周祭の期間の方が長いのである。この原因を

①周祭の周期が太陽年（三六五日）よりも長いために周祭が遅れていく
とすることも一つの方法である（『殷墟卜辞研究』がこの方法を採る）。

しかし、周祭は周期的に行われており、この定期時間に天体観測による基準の存在を求めるならば、①は前述のように不適當である。第五期には「十三月」が見られないことを考えると、月次については閏月を設けない純粹な太陰暦であったとし、

②太陽暦としての周祭と、純粹な太陰暦としての月次の併用
とすることもできる。

結果から言えば、②とするのが暦譜の復元に適していた。第五期周祭は平均して一年に一句程度ずれており、このずれは太陽暦（約三六五日）と太陰暦（約三五四日）の違いに当たる。この暦法を本稿では「無閏月周祭暦」と呼ぶ。無閏月周祭暦は、自然現象である月齢に基づく月次を用いつつも、月次の太陽暦に対する補正をせず、一方で、太陽暦における季節としての表記は人為的な周祭を用いるという特異な暦法である。

表5—1 周祭記時を含む金文

No.	器名	祀	月	祭名
1	宰觥角	口祀	6	翌
2	埴毀	口祀	11	易
3	寢孳方鼎	口祀	12	易
4	二祀卣卣	2	1	多
5	四祀卣卣	4	4	翌
6	豊彝	6	一	多
7	小臣呂罍	6	4	多
8	六祀卣卣	6	6	翌
9	崔卣卣	9	9	易
10	戊鈴彝	10	9	易
11	小臣兪尊	15	一	多

表5—2 金文曆

月	祭祀	No.
1月	多	4
2月	多	
3月	多	
4月	多~翌	5, 7
5月	翌	
6月	翌	1, 8
7月	翌	
8月	翌~祭	
9月	祭	9, 10
10月	祭	
11月	祭	2
12月	祭~多	3

なお、後述するように、周祭曆でも閏月が必要となるが、これは太陽年に対するものであり、太陽曆は冬至などを基準とするのであるから、陰曆の新月即朔日のような一日単位の固定がされることはなく、数日程度のずれは受容可能である。

六、金文曆譜と甲骨文曆譜の乖離

前項で見たように、第五期甲骨文では太陽曆と純粹な太陰曆を併用する曆法が用いられていたが、金文の曆は甲骨文に一致するのだろうか。

周祭が記された金文は表5—1のように十一器あり、うち九器に月次が記されている。周祭の記述を含む金文はすべて殷末に断代されているが、第五期甲骨文に見られる周祭の月次に対する移動はなく、年次が少なくとも十年以上にわたっているにも関わらず、表5—2の曆にすべて収まる。これは、金文と甲骨文の曆譜が乖離していたことを示しており、金文の曆については祭祀と季節が一致することから、閏月を設ける太陰太陽曆が用いられていたと考えられる。

従来説では金文と甲骨文を同一の曆に基づくものとして扱っていたが、別個の曆に基づく記時だったのであり、本稿では、甲骨文曆譜を復元した上で金文の曆譜について具体的に述べる。

第二章 殷末曆譜復元の諸条件

前章で明らかにしたように、甲骨文第五期では太陽暦と太陰暦の組合せである無閏月周祭暦が用いられていた。これに基づき曆譜を復元するのだが、曆譜復元に際しては幾つか確認事項がある。

一、口祀について

表6 幾祀統計

祀	金文	甲骨文	合計
1	0	0	0
2	1	1	2
3	0	3	3
4	1	6	7
5	0	2	2
6	3	1	4
7	0	1	1
8	0	1	1
9	1	4	5
10	1	6	7
14	0	2	2
15	1	0	1
17	0	1	1
19	0	1	1
23	0	1	1
口祀	3	11	14
合計	11	41	52

第五期甲骨文および金文には「口祀」という記時が見られる。従来、これは「廿祀」と解されてきた。しかし、甲骨文の廿はV字型であり、口字とは異なる(挿図1参照)。裘錫圭「関于殷墟卜辞中的



挿図1

- 右上 合集37867「王口祀」
 右下 合集37472 (1.5倍)「獲狐廿」
 左 合補11466「…月隹廿祀三」

所謂「廿祀」「和」廿司(『文物』一九九九年第十二期)は口を曰の意とし、「王廿祀」「決非紀年数之辞、而記王下令举行某種祭祀之辞」とするが、「在四月、隹王二祀」(合集37836)などの記時と同様に「在三月、隹王口(祀)」(合集37846)と用いられており、記時であることは疑いない。表6に甲骨文と金文の幾祀記時を統計した。この表から明らかなように、「一祀」がなく「口祀」が多いのであるから、口祀を元年またはそれに近い意味とするのが妥当である。また、口

祀が多い一方で二十祀の前後が少ないことも、口祀が廿祀ではないことを支持している。なお、合補1166には「…(欠)三月、佳れ廿祀又三」とあるが、この廿はV字形であり(挿図1参照)、二十三祀である。

「口」が何を表したのかについて、口形は甲骨文では「口」「曰」の意と祭祀器具である「𠂔」(サイ・うけばこ)の意に用いられることが多いが、「兄」字などでは人型の頭部として「口」形が用いられており、このことから、口祀の「口」には頭や首から転じて初頭としての意味があると考えられ、敢えて釈するなら「口祀」は「首祀」である。ただし、本稿では字形に従い「口祀」と表記する。

二、第五期の総年数について

「口祀」を「廿祀」と読んだこともあつて、従来説では第五期の年数が多くなっており、『殷曆譜』では帝乙三十五年・帝辛五十二年の合計八十七年、『殷墟卜辞研究』は帝乙二十年・帝辛三十一年の合計五十一年とする。しかし、第五期には周祭が一年に一句程度ずれるのであるから、期間を長く想定する方が、多くの記時が適合することになる。極端に言えば、月次は十二通り、周祭記時は甲日のものなので六通りであり、それぞれ異なる七十二年の暦を想定すれば、「幾祀」の記述を除いて、複数列が連続したものを含め全ての周祭記時が自動的に収まることになる。従つて、曆譜期間を短く収めることが復元作業としては蓋然性が高いと言え、本稿はできるだけ短い期間に記時が集められるように曆譜を復元する。

三、一ヶ月の長さについて

平勢隆郎氏は、新月後に観測される月(朏。いわゆる三日月)が初めて見えた日を「朔」とするため、観測によつては三十一日以上の特大月が起こりうるとした。^⑤ 朏などの観測が月の日数の決定に用いられていたことに異論はない

が、それはあくまで将来の暦に対してであり、月齢が約二九・五日であることは経験上から明らかだったはずであるから、その時々々の観測に完全に拠っていたとすることはできない。因みに、朔望月は月の運行（公転軌道）によって数時間の長短が生じるが、二十九日以上三十日未満の範囲に収まる。

結果的に史料上に見える暦は記時としてのみ用いられているが、暦とは本来、それを元に予定を決めるためのものであり、当日の晩に初めて朔日が決定されるという暦法を用いていたはずがないのである。平勢説を採用すると、新月後に曇天雨天が続いて月が観測できない場合には、異常に長い月になってしまいうことから、机上の空論であることが証される。また平勢説では、暦決定後に伝達期間が必要であることも考慮されていない。

本稿では、三十一日以上の特大月や二十八日以下の特小月を想定せずに暦譜を復元する。

四、小月の周期について

月齢の周期である朔望月は約二九・五日であるが、より正確には平均二九・五三〇六日であるため、小月（二十九日）は大月（三十日）よりも少なく、大月・小月比はおおよそ一対〇・八八五であり、小月はほぼ十七ヶ月に八回の割合となる。

第五期の周祭記時はほとんどが甲日のものであるため、甲日を基準に暦譜を復元するが、同一月に甲日が二回しかないのは小月十ヶ月に一回であるから、甲日二回の小月が現れるのは前掲の比率から二一・三ヶ月に一回の割合となる。前述のように朔望月には若干の長短があるが、本稿では二一・三ヶ月という数字を尊重し、甲日二日の小月を二十一または二十二ヶ月間隔として暦譜を復元した。

五、干支について

前近代の中国においては、日付はすべて干支で記されており、甲骨文も例外ではない。説明するまでもないが、干支とは十干（甲乙丙丁戊己庚辛壬癸）と十二支（子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥）を組み合わせたものであり、十と十二の最小公倍数である六十が一周期となり、甲子に始まり癸亥に終わる。本稿は、次表のように甲子であれば「01甲子」として表記する。

干支表

01 甲子	02 乙丑	03 丙寅	04 丁卯	05 戊辰	06 己巳	07 庚午	08 辛未	09 壬申	10 癸酉
11 甲戌	12 乙亥	13 丙子	14 丁丑	15 戊寅	16 己卯	17 庚辰	18 辛巳	19 壬午	20 癸未
21 甲申	22 乙酉	23 丙戌	24 丁亥	25 戊子	26 己丑	27 庚寅	28 辛卯	29 壬辰	30 癸巳
31 甲午	32 乙未	33 丙申	34 丁酉	35 戊戌	36 己亥	37 庚子	38 辛丑	39 壬寅	40 癸卯
41 甲辰	42 乙巳	43 丙午	44 丁未	45 戊申	46 己酉	47 庚戌	48 辛亥	49 壬子	50 癸丑
51 甲寅	52 乙卯	53 丙辰	54 丁巳	55 戊午	56 己未	57 庚申	58 辛酉	59 壬戌	60 癸亥

六、工典について

周祭では、祭祀に先立って行われる「工典」という儀礼があり、これは上甲祭祀の一句前の甲日に行われる。工典を祭祀の第一句とする説もあるが、工典が前祭祀の末句と重なる場合があるので、本稿では工典の翌句である上甲祭祀を第一句とした。ただし、数字上では工典を第〇句・上甲祭祀を第一句とするか、工典を第一句・上甲祭祀を第二句とするかの違いなので、暦譜復元自体には影響しない。

七、五種祭祀の祀首について

多・翌・祭系のいずれが五種祭祀の最初であるかについては諸説あり、『殷曆譜』は多とし、『殷墟卜辞研究』は祭とし、常玉芝『商代周祭制度』（中国社会科学出版社、一九八七年）は翌とする。この問題は、五種祭祀が循環しているために帰納的に求めることはできず、曆譜復元によつて演繹的に求められる性質のものである。

結果から言えば、祭が五種祭祀の祀首であり、「王幾祀」の初頭にあたる祭祀であった。

八、衣祀について

甲骨文には「衣」と呼ばれる祭祀があり、第五期にも「48辛亥卜して貞う、王賓し、執りて上甲より多后に至るまで衣するに、尤亡きか」（合集35488）のような例があり、「多后」の語から「衣」が合祀の意であることが判る。

この他に、第五期には五種祭祀の前にも「衣」の可否が貞われており、「40癸卯王卜して貞う、酒し翌日し、上甲より多后に至るまで衣するに崇亡きか」（合集37844）のようにあるが、これは特定日の祭祀ではなく、当該祭祀（この場合は翌）を合祀と見なし祭祀期間全体を指して「衣」の語が用いられていると考えられる。

後者については卜日が癸日に固定され、また祭祀日が上甲祭祀の前日であるから周祭と関連づけられるが、前者については卜日が一定でなく、また五種祭祀も記されていないことから、周祭とは関係ない別個の祭祀と考えられるので、曆譜復元には利用できない。

九、誤刻と誤釈について

甲骨文は占卜に関する記録を亀甲・獣骨に刻したものであるが、占卜ごとに刻辞を行ったのではなく、刻辞は蓄積された記録を一時に刻するという手順で行われている。そのため誤った刻辞（誤刻）が見られ、特に周祭は連続して行われるという性質上、誤刻が多くなっている。第五期周祭の記時に関して、同版記時から誤刻が修正できるものを

挙げる。

合集35416……「正月51甲寅、飠上甲」……月211甲戌、飠大甲」と記すが、「月2」を「十二月（十月2）」とする
と大甲祭祀は上甲祭祀の後であり矛盾するので、「月2」は「二月」の誤刻である。

合集35698……七月に祭羌甲、四月に祭象甲を記すが、象甲祭祀は羌甲祭祀の翌旬であり、どちらかの月次が誤刻である。

合集35745……「十月01甲子、翌象甲」「二月01甲子、祭大甲」を記すが、これらの祭祀間を四ヶ月とするのは長すぎるので、「十月」は「十二月（十月又2）」の誤刻である。

英国3503……11甲戌、51甲寅までの五旬を全て三月と記すが、一部は二月または四月の誤刻である。

また、甲骨文は誤った釈字（誤釈）をされることがある。甲骨文を釈したものとしては姚孝遂主編『殷墟甲骨刻辞摸挐總集（總集）』（中華書局、一九八八年）が最も片数が多く、『甲骨文合集』をはじめ多数の甲骨著録の釈文を載せており、本稿も参考にしたが、『總集』には誤釈が多く、特に第五期は文字が小さいため文字の読み違いが多い。注に『總集』の誤釈のうち、殷末曆譜復元に関係するものを挙げた^④。

一方、『殷墟卜辞研究』には誤釈は少なく、曆譜復元に関係する記述で本稿の釈と食い違うものは以下の三片だけである（以下、挿図2参照）。

合集35411……『研究』は第二条を十二月とするが、「2」とした文字の上画は甲骨片の傷であり、十一月である。

合集35653……『研究』は第二条を十一月とするが、「十月又2」の後には「2」が見え、十二月である。

合集35701……『研究』は十二月とするが、「2」としたものは甲骨片の傷程度の細線であり、「十月又2」の後には右上に欠落していると考えられる。

この他、綴合が誤っている場合があり、合補12808では「六月51甲寅、翌工典」……月31甲午、大甲（祭祀名欠落）」とあるが間隔が正しくない（本来は三旬）。拓本を見ると「六」と「月」の間に「四」があり「六四月」となっており



挿図 2

- 右上 合集35653 中段「癸丑王卜貞／旬亡尤王占／大吉在十月／又二
甲寅祭羌／甲才茭甲」
- 左上 合集35411 中段「癸未卜貞／王旬亡尤／在十月又一／甲申莠／
酒祭上甲」
- 右下 合集35701 上段「…貞／…旬亡／…在十月又／…」
- 左下 合補12808（誤った綴合）「癸丑卜貞／王旬亡尤／在六四月／甲
寅工典／其□」

り、本来連続しない二片を綴合してしまったものである（挿図2参照）。

第三章 殷末曆譜の復元

一、曆譜復元の対象

周祭記時のうち、曆譜復元に際して有効に用いることができるのは、月次・干支・祭祀名・祭祀対象が揃っているものだけである。なぜならば、一つでも欠けると曆譜上で当てはめられる年次が増加するからであり、例えば月次が欠ければ十二倍になり、干支が欠ければ（周祭記時は甲日なので）六倍になる。ただし、「王幾祀」の記述があるものはこの限りではなく、月次ともう一つの要素があれば対象となる。人方・孟方征伐も年次をある程度特定できるのであり、周祭記時を含むものは祭祀対象または月次が記されていないなくても対象とした。以上の条件に適するのは、卷末表Aに挙げた一二〇片である。

周祭記時が甲日のものであるため、甲日を基準として曆譜を復元したが、「50癸丑トして貞う、王旬に尤亡きか。在六月。51甲寅、上甲に多す」（合集35422）とあった場合、「六月」は「51甲寅」ではなく「50癸丑」に対する記時であることには注意する必要がある。

曆譜復元に際し、複数の年次に当てはめられる片については、他片との連続を重視し、それがない場合には便宜上、早い方の年次に属するものとした。

第五期の曆譜復元の結果は卷末表Bのようになった。以下に各時期の曆譜と曆法について補足説明をする。

二、帝辛代の曆譜と曆法

帝辛代は、五種祭祀の祭祀期間はいずれも十一句であり、祭飢飢の祭系は一句ずれて行われるので合計十三句、多が十一句、多翌間に一句の空きがあり、翌が十一句なので、合計三十六句（三六〇日）が基本形となる。周祭は太陽年に基づくので、約二年に一回、余分の一句を設ける（「閏句」と呼称する）。帝辛代の閏句は、一部を除いて祀の初め、祭系の前に設けられている。無閏月周祭暦は、周祭が太陽年（約三六五日）、月次が太陰暦（約三五四日）なので、周祭は月次に対して一年に約一句遅れ、帝辛一祀では年初が十一月上旬だったものが、帝辛十二祀では三月上旬となっている。帝辛一〜八祀には適合する片が特に多く、この八年間には卷末表Aの一・二〇片のうち半数以上が含まれており、できるだけ短期間に記時を集中させるという目標に沿うものとなった。

帝辛十三祀以降については、帝辛十二祀までの暦法に当てはまる片はないが、暦法に変更があったとすれば、幾つかの片が暦譜に適合できる。具体的には、十三祀以降は祭一句ではなく飢一句が年初とされ、閏句が多翌間に置かれたとすると、卷末表Bのように数片が収まる。帝辛十七祀以降については、「（十）祀又七」（合集3758）、「十祀又九」（合集3786）、「廿祀又三」（合補1146）の記述があり、帝辛在位は二十三年以上と考えられるが、十六祀を最後に帝辛代の周祭記時は途絶える。

三、文武丁後期と王位継承期

文武丁代の記時、すなわち祭一句が十月以前のものについては、帝辛代と同じ周祭日程とすると暦譜に収まらない。結論から言えば、文武丁の五種祭祀は十句であり、表4-1の祀序のうち、武乙が祀られていない形であった。甲骨文では「期」が異なる王の継承は擬制的血縁によると考えられるが、武乙は第三期の王であるため、第五期の文武丁代には武乙一人に周祭の一句を設けるほどの必要性はないと判断されたためであろう。ただし、文武丁代には武乙は周祭で祀られていないだけであり、丁祭では多く祀られている⁴³。

表7 第五期周祭日程

文武丁代			帝辛代		
1	祭1旬		1	祭1旬	
2	祭2旬	飠1旬	2	祭2旬	飠1旬
3	祭3旬	飠2旬	3	祭3旬	飠2旬
4	祭4旬	飠3旬	4	祭4旬	飠3旬
5	祭5旬	飠4旬	5	祭5旬	飠4旬
6	祭6旬	飠5旬	6	祭6旬	飠5旬
7	祭7旬	飠6旬	7	祭7旬	飠6旬
8	祭8旬	飠7旬	8	祭8旬	飠7旬
9	祭9旬	飠8旬	9	祭9旬	飠8旬
10	祭10旬	飠9旬	10	祭10旬	飠9旬
11		飠10旬	11	祭11旬	飠10旬
12			12		飠11旬
13	多1旬		13	多1旬	
14	多2旬		14	多2旬	
15	多3旬		15	多3旬	
16	多4旬		16	多4旬	
17	多5旬		17	多5旬	
18	多6旬		18	多6旬	
19	多7旬		19	多7旬	
20	多8旬		20	多8旬	
21	多9旬		21	多9旬	
22	多10旬		22	多10旬	
23	翌1旬		23	多11旬	
24	翌2旬		24	空	
25	翌3旬		25	翌1旬	
26	翌4旬		26	翌2旬	
27	翌5旬		27	翌3旬	
28	翌6旬		28	翌4旬	
29	翌7旬		29	翌5旬	
30	翌8旬		30	翌6旬	
31	翌9旬		31	翌7旬	
32	翌10旬		32	翌8旬	
33	空		33	翌9旬	
34	空		34	翌10旬	
35	空		35	翌11旬	
36	空		36		

殷末曆譜の復元

文武丁代の周祭は、祭系が合計十二旬、多および翌が十旬、最後に空きが四旬あり、やはり合計三十六旬が基本である。従って、文武丁・帝辛各代の周祭基本型の違いは表7のようになる。文武丁代の間旬は帝辛代と同じく、一部を除いて祭の前に設けられている。

以上のように文武丁代の曆譜を復元すると、従来は帝辛十祀とされていた人方への遠征は文武丁十祀であり、文武丁代はそれから六年後まで続き、在位十六年であった。最末年の十六祀はやや不規則になっており、祭系は各十旬（合計十二旬）であるが、多・翌は十一旬である。これは、多の期間中に文武丁が死亡したため、急遽、第十一旬が追加されたものと考えられる。

前述のように、帝辛代は多翌間に一句の空きが設けられていたが、帝辛一祀だけは文武丁代と同じく多翌間に空きを設けずに翌が始められていたようであり、合集3539に「七月11甲戌、翌上甲」とあるが、これは帝辛一祀多十一旬の次旬にあたる。合集3536などから、この後に翌十一旬を年末とするように一句の調整期間が設けられたことが判り、卷末表Bのようになる。

「口祀」については、「口祀」の記述に「二祀」との連続年とはできないもの

があるため、帝辛一祀だけではなく文武丁十六祀も含まれるとしなければならない。具体的には、帝辛二祀のシの衣は四月20癸未（合集3786）の占卜であるが、口祀のシの衣には三月60癸亥（合集37864）があり、二句のずれがあるから少なくともこの両者の間には二年以上必要なのである。なぜ文武丁在位中に「口祀」が記されたのかについては、文武丁十三・十四祀に該当する記時がほとんどなく、文武丁十五祀に急増していることから、文武丁十三祀以降は、文武丁は生存はしているが傷病によって祭祀を主催できない状態にあり、文武丁十五祀において、実質的に帝辛が王として祭祀を行うようになり、そのため文武丁在位中でも「口祀」とされたと考えられる。文武丁在位中に「口祀」が用いられていたことを証するものに、次の一片がある。合集37867は「口祀」を記すが、文武丁・帝辛ともに一祀には該当せず、卷末表Bでは文武丁十六祀に当たる。さらに、この片は31甲午に工典、51甲寅に上甲の翌を記すが、工典は上甲祭祀の一句前のはずであり他片の記述とは異なる。前述のように文武丁十六祀の多期間中に文武丁が死亡していることから、工典後に急遽文武丁を祀るための多十一句が設けられたため、工典と上甲祭祀との間が一句空いてしまったものと考えられ、文武丁十六祀の多翌間祭祀日程は次のような経過となる。

（多十句・翌工典） 31甲午 $\parallel$ 多祖甲・翌工典 40癸卯までに多十一句の追加が決定される

（多十一句） 42乙巳 $\parallel$ 多武乙 44丁未 $\parallel$ 多文武丁 （翌一句） 51甲寅 $\parallel$ 翌上甲

以上のように、文武丁十六祀の段階で「口祀」が用いられていたことが証されたが、さらにこのことは、一六祀の多十句（甲午 $\times$ 癸卯）中に文武丁が死亡したことを示唆している。なお、前王の在位中に口祀が記されることが通常であったのか特例であったのかについては、帝辛代以外には甲骨文に口祀記時が見えないので、明らかにできない。

四、文武丁前期

文武丁八祀以前には、祭祀期間を十句とする無旬月周祭暦でも当てはまる片はほとんどない。そこで文武丁九祀に

注目すると、祭が八月に開始されており、これは、祭祀記時が月次に対して移動しない金文記時に一致する（表5—2参照）。このことから、八祀以前には閏月を設置しており、金文と同様に月次と祭祀を一致させていたという推測が可能である。これに基づき曆譜を復元したところ、卷末表Bのようになり、比較的多くの甲骨片が収まった。この曆法は閏月を設置するが、年次の基準は周祭で表される太陽曆なので、厳密には太陰太陽曆とは異なり、本稿では「有閏月周祭曆」と呼称する。なお、第五期には十三月が見えないので年中置閏の可能性もあるが、甲骨文では第一—三期までは年末置閏なので、有閏月周祭曆も年末置閏とするのが妥当であり、第五期に十三月が見えないのは文武丁一祀—八祀の甲骨片の絶対数が少ないためであろう。

五、曆譜に適合しない記時について

卷末表Bに復元した殷末曆譜には、適合しないものが卷末表Aの一—二〇片中十六片あり、次の通りである。

合集35411・35528・35644・35645・35646・35660・35748・35893・36482・37863・37848・合補10976・11001・

11299・英国2504・2510

これらが曆譜に収まらなかった原因には次の四つが考えられる。

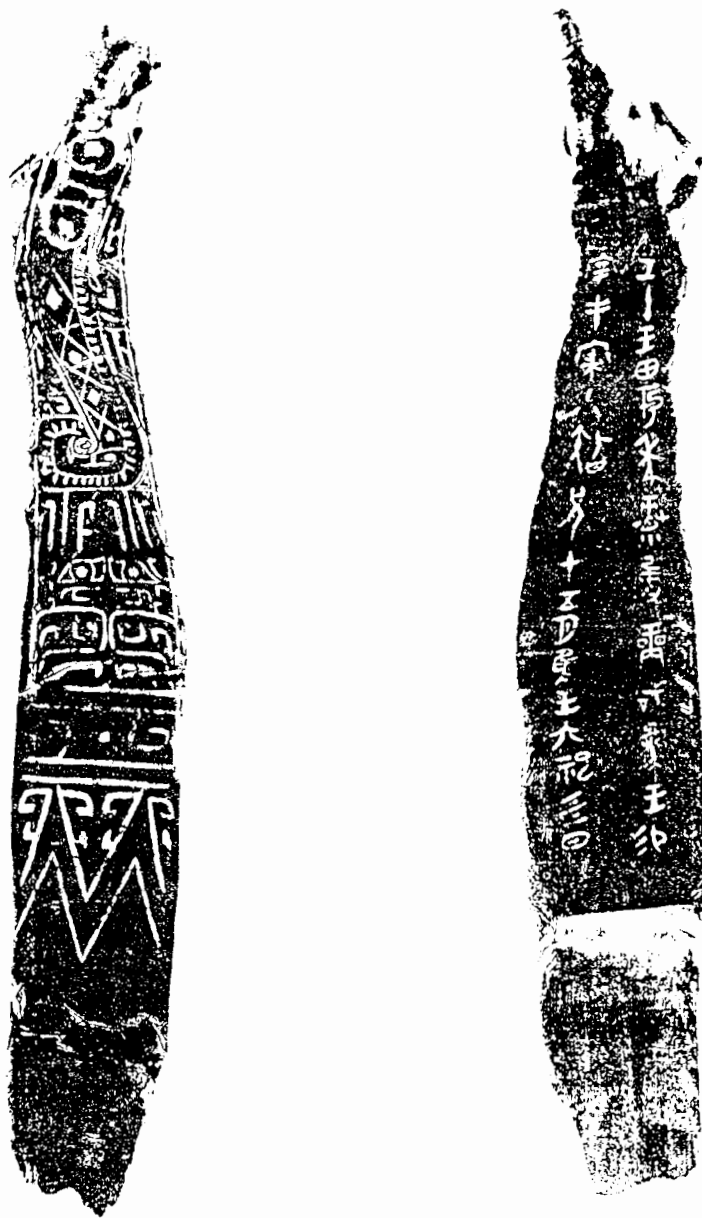
①周祭記録に基づかない記時

これに該当するのは合集37848・合補11299である（挿図3・4参照）。合集37848・合補11299は表面に青銅器の紋様に似せた彫刻があり、裏面には対応する形で金文に似せた刻辞がされており、字体も金文に近い。しかし、青銅器の制作過程に甲骨は必要なく、甲骨で金文の習刻をすることや甲骨への青銅器紋様の彫刻は不要である。つまり、これらは甲骨を青銅器に模した一種の遊戯的制作であり、周祭記録に基づく刻辞ではないと考えられる。

②月次計算の誤り



挿図 3 合集37848 (0.7倍)



挿図 4 合補11299(0.6倍)

周祭記時は「50癸丑トして貞う、王旬に尤亡きか。在六月。51甲寅、上甲に多す」（合集35322）のように卜旬の後に記されるが、卜旬自体の占トは「50癸丑トして貞う、王旬に尤亡きか」であり、祭祀の占トは卜旬とは別に存在し、「11甲戌トして貞う、王賓し大甲に多するに尤亡きか」（合集35336）のようにある。つまり、周祭記時が付された卜旬は、刻辞時に卜旬占トと周祭占トが組み合わされたものと考えられる。しかし、注意すべきは第五期には周祭の占ト自体には月次が記されないことであり、月次については、卜旬記録に記されていない場合は刻辞時に逆算して記したことになる。そのため、計算違いにより一句程度のずれが発生し、例えば十月上旬の記時を「九月」と記すようなことが起こったと考えられる。これを認めるならば、①を除く一四片のうち十二片は次のように解決できる。

合集35411……第一条「十一月」が十二月上旬であれば帝辛三祀
合集35528……「十月」が九月下旬であれば文武丁十一祀

合集35644……第三条「九月」が十月上旬であれば帝辛一祀

合集35645……第二条「十月」が十一月上旬であれば帝辛四祀

合集35646……第三条「十二月」が十一月下旬であれば帝辛八祀

合集35660……第一条「五月」が六月上旬であれば帝辛三祀

合集35748……第一条「正月」が二月上旬であれば帝辛一祀

合集35893……第一条「八月」が七月下旬であれば帝辛十六祀

合集37863……第二条「九月」が十月上旬であれば帝辛一祀

合補11001……第一条「十二月」が十一月下旬であれば文武丁十一祀

英国2504……第一条「九月」が八月下旬であれば文武丁十一祀

英国2510……第一条「十二月」が正月上旬であれば帝辛一祀

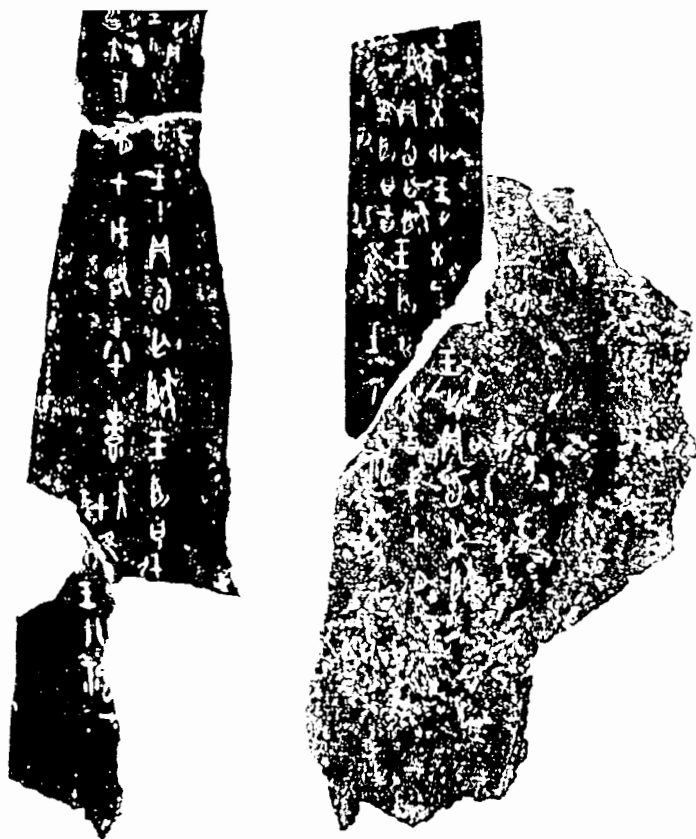
これらには一定の傾向が見える。帝辛一祀に当たるものは四件であるが、いずれも上旬記時を前月の下旬記時に誤刻したとすると適合でき、同時に刻した一群が月次計算を誤ったものとするができる。同様に、文武丁十一祀には三件あるが、いずれも下旬記時を翌月の上旬に誤刻したとすると適合でき、帝辛三祀には二件あるが、いずれも上旬記時を前月の下旬に誤刻したとすると適合できる。帝辛四祀・七祀・十六祀については一例だが、ずれは一句であり、帝辛一祀などの例に照らせば月次計算の誤りとすることができらるだろう。

③千支の誤り

合集3365は人方征伐に関係するものであり、周祭記時は「十祀九月31甲午、甌上甲」であるが、文武丁十祀の九月に31甲午は存在しない。しかし、人方征伐に関する文武丁十祀の記述を見ると、この他に「十月31甲午」（合集3366）と「十二月31甲午」（英属3393）があり、一ヶ月は二十九日から三十日であつて、最大でも六十日であるから、「九月31甲午」と「十月31甲午」は二ヶ月連続して同一千支が見え矛盾する。『殷墟卜辞研究』は複数回の人方遠征を想定するが、一連の日程として復元されており（卷末表B参照）、これは適当ではない。『殷曆譜』『殷虚卜辞綜述』（科学出版社、一九五六年）は年中置閏説をとり、九月の後に閏九月を設けるが、年中置閏そのものの有無は別にしても、十祀に閏月を入れると九祀正月・二月の条文が曆譜に収まらなくなる。従つて、合集3365は41甲辰をその一句前の31甲午に誤刻したものとするのが妥当である。誤刻の原因は、十祀十月・十祀十二月の両片がともに31甲午だったためであろう。

④綴合の誤り

合補10976（挿図5参照。上が合集37847、下が合集37872の綴合片）については、綴合により「隹れ王の十祀又……」と読みうるが、周祭記時の「（七月）41甲辰、𠄎𠄎甲」は、文武丁・帝辛代ともに十祀以降には適合しない。しかし、拓本を見ると綴合線が整っていないことから、綴合が誤っていると考えられる。十祀以降で甲辰に𠄎甲の𠄎（𠄎



挿図5 左 合補10958 (一部) 右 合補10976

六句) があるのは文武丁十四祀であり、合集3784の「隹れ王の十……」の後には別片に「祀又四」が続くと考えられる。因みに、「幾祀」に関する綴合の誤りには、合補10958 (挿図5 参照) もあり、英国2503と「王八祀」の片を綴合しており、英国2503は卷末表Bでは帝辛七祀に当たり適合しないが、合補2500の綴合は文字の中央線がずれており、不適切な綴合である。

以上によって、卷末表Aのすべてが卷末表Bに適合するか、または周祭に基づかない記述であることが判明した。②③④④は合集2500のみ) については斜体にして卷末表Bに収めた。

六、実用暦としての整合性

第一章で述べたように、従来説の復元には天体観測から導き出せない周期を想定するという不備があった。一方、本稿では周祭を太陽年に基づくものとして卷末表Bのように復元し、暦法は文武丁中途までが有閏月周祭暦、それ以降が無閏月周祭暦であり、五種祭祀の期間は文武丁代が十句、帝辛代が十一句とした。これを元に暦譜上の特徴を簡略化して時間順に並べたのが表8であり、実用された暦として矛盾がないかどうかを確認する。

甲日が二回の小月は間隔が二十一ヶ月か二十二ヶ月にまとまり、二九・五三〇六日という平均朔望月から導かれる二一・三ヶ月に近いものとなった。

閏句については、ほぼ二年に一回であり、多くが年初である祭の前に置かれている。閏句の間隔を見ると、文武丁末と帝辛四六祀において一年ずつ短縮されている。太陽年は三六五・二四日なので、二十年に一回程度一年短縮させる（閏句を連続年で置く）か、四十年に一回程度二年短縮させる（一年に二回閏句を設ける）操作が必要であるから、前者は文武丁代の十六年間にずれた分の調整であろう。後者については、それから数年後であり、やや期間が短い。この操作は、暦の調整基準の変更が原因であり、文武丁代には周祭が月次に対して遅れて基準から外れた際に翌年に閏句を置いていたものが、帝辛代には予測の下で当年が基準に当てはまるように閏句を設置したと考えられる。一般に太陽暦で用いられる基準は冬至・春分・夏至・秋分のいずれかであるが、周祭暦で用いられた基準については、無閏月周祭暦の月次から考えて多一句を冬至としていたか、翌末句を夏至としていたとするのが妥当であり、祭祀期間の変更を考え合わせると、以下のようなになる。文武丁代には翌十句（周祭第三十二句）の夏至を暦の基準とし、冬至は多二句（周祭第十四句）に当たったが、帝辛代には祭祀期間が十一句になったため、夏至（周祭第三十二句）は翌六句となり、基準としては不適當となり、逆に冬至（周祭第十四句）が多一句となり、こちらが暦の基準になった。

表8 殷末暦とその変遷

文武丁代																
年次(祀)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
暦法	有閏月周祭暦								無閏月周祭暦							
祭祀期間	10旬															
年初月	8	7	8	8	7	8	8	7	8	8	9	9	9	10	10	10
閏旬の次祭祀	祭	—	祭	—	祭	—	祭	—	祭	—	祭	—	祭	—	𠄎	—
〃 間隔(年)	—	—	2	—	2	—	2	—	2	—	2	—	2	—	1.4	—
甲日2回の小月	—	12	—	10	6	—	2	—	11	8	—	6	—	3	—	1
〃 間隔(月)	—	/	—	22	21	—	21	—	21	21	—	22	—	21	—	22

	帝辛代																
年次(祀)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17～
暦法	無閏月周祭暦																
祭祀期間	11旬																
年初月	11	11	11	12	12	1	1	1	2	2	3	3	3	4	4	5	不明
閏旬の次祭祀	祭	一	祭	多	一	祭	一	祭	一	祭	一	祭	翌	一	翌	一	
〃 間隔(年)	1.6	一	2	1.4	一	2	一	2	一	2	一	2	1.6	一	2	一	
甲日2回の小月	10	一	8	一	5	一	3	12	一	9	一	7	一	4	1	一	
〃 間隔(月)	21	一	22	一	21	一	22	21	一	21	一	22	一	21	21	一	

このように考えると帝辛代の閏旬間隔の短縮が説明でき、文武丁代には翌の末旬が基準なので、それが観測された場合、すぐ次の祭の前に閏旬を置くことができるが、帝辛代には多一旬を基準とするので、閏旬を次の祭の前とすると調整が半年以上後となるため、あらかじめ当年の冬至時期を予測して閏旬を早めて設ける必要が生じたのである。なお、帝辛十三祀に姤が年初とされ、閏旬が多翌間に設けられたことについては、多翌間の空き期間を春分(周祭第二十三旬)とする暦基準の変更があったためと考えられ、閏旬についても春分の観測により、そのすぐ後の翌の前に置かれたのであろう。

以上のように、本稿が復元した暦譜は、月齢および冬至夏至等の観測に基づき実用されていた暦として問題はない。なお、『合補』には綴合例が幾つか載せられており、ここからも暦譜復元の正確さが確認できる(注を参照)。また、各年代ごとの適合片数が表9のように増減の傾向がはっきりと見られることにも復元の正確さを見ることができ、『殷墟卜辞研究』の復元では片数の増減に一貫性がないのとは対照的である。

七、周祭暦について

殷末には太陽暦を周祭によって表示する周祭暦を用いており、特

表9 周祭記時甲骨片数

年次	文武丁				帝辛				合計
	1~4	5~8	9~12	13~16	1~4	5~8	9~12	13~16	
甲骨片数	3	4	12	17	41	26	9	6	118

(参考) 『殷墟卜辞研究』の復元による甲骨片数

年次	帝乙				
	1~4	5~8	9~12	13~16	17~20
甲骨片数	23	16	17	5	0

帝辛							合計
1~4	5~8	9~12	13~16	17~20	21~24	25~	
4	8	6	4	18	5	3	61

に文武丁中期以降は閏月を廃し、月次を純粹な太陰曆とする無閏月周祭曆が用いられた。一方、金文に見える曆は月次と祭祀が一致しており、太陽太陰曆を用いていたと考えられる。しかし、これは二種類の曆が対立し各々が正統性を主張していたのではない。なぜならば、月齡觀測に基づく太陰太陽曆は一般の使用に適している一方、太陽の出没位置から冬至夏至などを判断する太陽曆は、高度な技術や知識を必要とし、まして王廷内で行われる周祭によって表記される周祭曆を一般に用いることは不可能だからである。従って、王廷以外における太陰太陽曆の常用を認めた上で、王権の象徴として周祭曆が用いられたと考えられる。

これと同じような状況で曆が用いられていたのがマヤ文明であり、太陽年に近似の曆が常用される他に、一年を二六〇日とする宗教曆が用いられていた。私見であるが、二六〇日というのは火星の会合周期¹⁾である七七九・九日の三分の一であろう。地球の外側を運行する外惑星は、地球上で逆行を含む複雑な運動をするが、二六〇日はそれを把握していたことを示す数字であり、さらには星の運行に関する情報を持っていた王の権威を示すものでもある。

このように、高い精度の觀測に基づく曆は王の権威の象徴となるものであるが、周祭曆の場合は、太陽の出没位置の觀測によって冬至夏至などを知り、それを元に周祭を行っていたのであるから、季節に対して最大一ヶ月程度のずれがある太陰太陽曆よりも正確に季節を表示するものであり、王の権威の象徴となり得たものと考えられる。さらに文武丁中期以降、有閏月周祭曆から無閏月周祭曆に移行するが、有閏月周祭曆

では太陰太陽暦と同様に、月次と季節が近似していたのに対し、無閏月周祭暦では月次が季節に対して移動をするので、月次はいわば「目盛り」としての機能となり、太陽暦としての周祭だけが季節を表示するものとなった。これは、周祭暦の特徴である、月次に拠らず祭祀の循環によつて一年を説明することを強調するものであり、より強く王の權威を主張するものであったと考えられる。

八、金文暦について

第五期の甲骨文では周祭暦が用いられていたが、一方、金文の暦は一般に常用された太陰太陽暦であり、周祭暦に基づいて行われた周祭を、太陰太陽暦に拠つて記したと考えられる。

しかし、一部の金文には、根本的に甲骨文とは食い違う記述がある。小臣兪尊は「隹れ王 人方を征するより来る、隹れ王の十祀又五、多日」とするが、人方征伐は十祀であり十五祀ではない。また、殪殷では「武乙妣戊爽の翌日」を記すが、甲骨文には武乙配妣に対する周祭は見えない。

つまり、金文の記述は甲骨文の周祭記時を必ずしも正確には反映していないのであるが、全ての金文の記時が正確であるかどうかは判らない。そこで、金文の暦を太陰太陽暦と仮定して、周祭暦に変換して卷末表Bに当てはめられるかどうかを調べる。

太陰太陽暦を周祭暦に置き換えるには、次の二つの変換が必要である。一つは無閏月周祭暦における月次の移動であり、閏月を設けないために徐々に月次が早まっていくのを修正しなければならない。観測が正しければ閏月はほぼ一九年に七回の割合になるから、最後の閏月がある文武丁七祀以降について、太陰太陽暦から周祭暦への月次の変換は次のようになる。

文武丁八ノ十祀Ⅱ±0 十一ノ十二祀Ⅱ+1 十三ノ十五祀Ⅱ+2 十六ノ帝辛二祀Ⅱ+3

表10 金文曆の周祭曆への対応

No.	器名	祀	月	干支	祭名	対象	付記	周祭曆における年月	周祭の対象
1	宰觥角	口	6	57庚申	翌	—	翌又五		なし
2	肆毀	口	11	05戊辰	姒	武乙姒戊			なし
3	寝孳方鼎	口	12	01甲子	姒	祖甲		帝辛2祀3月姒10旬	祖甲
4	二祀卣	口	2	153丙辰	多	大乙姒丙			なし
5	四祀卣	口	4	42乙巳	翌	—		帝辛4祀8月翌2旬	大乙
6	豊彝	口	6	—22乙酉	多	武乙			なし
7	小臣邑罍	口	6	430癸巳	多	—			なし
8	六祀卣	口	6	612乙亥	翌	—			なし
9	崔卣	口	9	954丁巳	姒	—		文武丁9祀9月姒2旬	大丁
10	戌鈴彝	口	10	946己酉	姒	—	姒日五	文武丁10祀9月姒0旬	41甲辰 工典
11	小臣兪尊	口	15	—54丁巳	多	—		文武丁14祀多1・7旬	丁・祖丁

*No. 11は文武丁10祀では不可

*No. 4・5は1旬のずれ（注を参照）

帝辛三〇四祀Ⅱ+4 五〇七祀Ⅱ+5 八〇十祀Ⅱ+6

もう一つは年初の違いであり、周祭曆では太陰太陽曆の八月ごろに当たる祭一旬を年初としていたが、太陰太陽曆では一月を年初とし、十二月を年末としていたはずである。前述のように、文武丁は周祭曆十六祀の多十旬に死亡したと考えられるから、太陰太陽曆の帝辛一祀正月は周祭曆帝辛一祀四月となる。文武丁一祀については、太陰太陽曆の文武丁一祀正月を周祭曆文武丁一祀の前年の正月とした。従って、太陰太陽曆の計算では文武丁は在位十七年となる。

その結果は表10の通りであり、祭祀対象が存在しない肆毀は省くとしても、残りの十器中、卷末表Bに当てはめられるのは五器であった。しかし、この五器はいずれも甲骨文の周祭記時が多い文武丁九祀〜帝辛四祀までに収まり信頼できる。適合しない器については、金文の各器には相互に矛盾する記時があり、例えば肆毀・寝孳方鼎・二祀卣は三者の記時が相互に繋がらず、曆譜復元の不十分さによつては説明できない。従って、金文中の周祭記時は

① 作器者が用いている太陰太陽曆によつて記される

② 周祭を正確に反映しない場合もあり、誤解または意図的な改編も含まれる

だったのであり、言い換えれば、少なくとも殷代金文の記時は、あくまで

も作器者による記述であり、王廷の周祭を忠実に記録した甲骨文との比較はされなかったのである。¹⁾

第四章 殷末史の再検討

一、孟方・人方征伐について

『殷曆譜』は人方征伐を帝辛十祀、孟方征伐を帝乙四十〇四十一祀とし、『殷墟卜辞研究』は人方征伐を帝辛十祀、孟方征伐を帝乙九〇十祀とし、いずれも人方征伐が孟方征伐に先立つものとしていた。しかし、本稿の曆譜復元の結果、人方征伐は文武丁十祀、孟方征伐は帝辛七〇八祀であり、人方征伐が先に行われたことが明らかになった。これに伴い、殷末史の再検討を行う。

人方征伐は、軍事行動が六ヶ月以上になる大規模な遠征であり、征伐の可否を貞う記述を含めれば前後九ヶ月に及ぶ。遠征日程は、九月末の60癸亥に始まり十二月までが往路であることを示す「人方を征す」、正月40癸卯以降に帰路であることを示す「人方を征するより来る」の記述があり、四月10癸酉に殷墟付近まで帰還している。²⁾

従来は、人方遠征が帝辛代とされていたので、この遠征の殷末史への影響が理解できなかったが、文武丁代であれば説明が可能である。人方遠征は文武丁十祀であるが、同時期に甲骨文にも二つの変化が見られる。一つは無閏月周祭の採用であり、前述のように、特殊な曆の使用は王の權威を象徴するものであり、この頃に王權が増強されたと考えられる。もう一つは周祭記時の増加であり、表9のように、文武丁八祀までは記述が少なかったのに対し、文武丁九祀以降は増加しており、このことも王權の強化が原因と考えられる。つまり、文武丁九祀ごろに王權が強化され、それにより軍事的には人方遠征の成功があり、文化的には無閏月周祭の採用と周祭の隆盛があったと結論できる。

殷文化を象徴するものは、甲骨と青銅器、そして金文中に賜与品目として見える貝であるが、亀甲・銅鉞・貝（子

安貝）は、いずれも東方からもたらされるものであり、王が東方の流通経路を確保していることの象徴と言えるが、人方遠征の成功は、東方の掌握をさらに確実にするものであり、王の権威と経済力を高めたと考えられる。

一方の孟方征伐について、孟は第一期には独立勢力であることを示す「方」を付した「孟方」として見える（合集3690）が、十二間期以降には殷の支配下に入り田獵地として記されており、第五期にも「壬戌卜して貞う、王其れ孟に田するに災い亡きか」（合集37153）や「癸丑王卜して孟に在りて貞う、旬に尤亡きか」（合集36566）のようにある。それが再び「孟方」とされ征伐の対象となっていることから、これは反乱と定義づけることができる。

孟方征伐は従来は文武丁代とされていたが、実際は帝辛七〇八祀であつた（卷末表B参照）。文武丁十祀ごろには人方遠征に見えるように殷王は強力な支配力を持っていたが、それから十年余りの帝辛七祀ごろにおいて、殷社会において何らかの矛盾が表面化し、それによつて孟方の反乱が引き起こされたのである。孟方征伐のあつた帝辛七祀ごろには甲骨文にも変化が見え、帝辛八祀以降には人方征伐とは逆に甲骨文が減少している（表9参照）。このことは、王の権威の失墜を表していると言えるだろう。ただし、帝辛代は二十三祀ごろまでは続いたと考えられ、また「孟方を征するより来る」の記述が見えるので、孟方征伐そのものは成功したと考えられる。

以上のように、文武丁九祀ごろに王権が強まり、帝辛七祀以降に弱体化したことが明らかにしたが、現時点では、何の原因として王権が盛衰したのかについては明らかにできず、今後の研究に継続する課題である。また、孟方の反乱と殷滅亡との関係も現時点では曖昧である。

二、貞人について

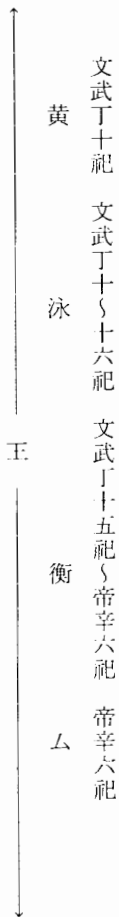
殷末史に関係するものとして、貞人署名について考察する。

第五期には王以外の貞人署名は少数であり、「黄」が五片、「泳」が一六片、「衡」が三三片、「ム」が二片に見える

が、一方で貞人としての「王」は五四五片に見える。こうしたことは他期の甲骨文にはなく、第一期白組・賓組・第二期出組・第三期何組のいずれの王卜辞も王以外の貞人が多く、王が独占することはない。一二間期歴組の貞人書名は「歴」一人であり、第三期無名組は貞人書名が全く見えないが、この二組は署名自体をしないという習慣であり、貞人名としての「王」も見えない。つまり、第五期のみ王署名の比率が圧倒的に高いのであり、これは祭祀権が殷王には独占されていたことを表している。

殷代を「祭政一致」とするのは、もはや古い概念であるが、祭祀が政治を反映していたことは確かであるから、祭祀権の独占は政治的にも殷王専権であつたか、あるいはそれを志向していたことを示している。周代の評価では紂王（帝辛）は政治と祭祀を怠つたとされ、『尚書』多士では「天を顛うやうこと罔く……天顛と民祗を顧みる罔し」とされているが、むしろ、政治的には王の専権を志向し、祭祀は大々的に行っていたのである。

第五期の貞人については、曆譜上にも特徴が見える。「黄」の占卜には周祭祀時はないが、「征人方」「来征人方」（合集3648など）があり、文武丁十祀に当たる。「泳」は文武丁十五祀（合集3561など）と文武丁十六祀（合集37867）に見え、また「来征…（欠）…」（合集36496）があり人方征伐であろう。「衡」は比較的長く、文武丁十五祀（合集3561）から帝辛六祀（合集35422など）まで見える。「ム」は合集35416と英国2508の二例だけであり、いずれも帝辛六祀に当たる。「王」は文武丁二祀（合集35676）から帝辛十六祀（合集35662）まで、全ての時期に見える。以上から、第五期貞人の出現時期は、次表のようになる。



この表からは、第五期の王以外の貞人は、同時には最大でも二名しか存在しなかったことが読みとられ、このことも第五期殷王による祭祀の独占状態を示している。

結 び

本稿は、無閏月周祭暦の発見により殷末暦譜の復元に成功し、その結果、従来説では五十年以上にわたっていた甲骨文が、約三十年間の制作であり、特に文武丁十五祀と帝辛八祀の十年間に約七割が収まることが明らかになった。さらに、暦譜復元により殷末史の再構成が可能となり、人方遠征によって第五期が隆盛していたことを明らかにした。また、これまでは、殷周交代時期の研究対象が文献史料および一部の西周金文に限られ、言い換えればすべて周側からの記述であったが、本稿の成果により、ある程度は殷側の記述である甲骨文からも分析することが可能となった。現在、殷周交代期の研究はほとんど進んでいない状況にあり、本稿の成果がそれを打破することが期待される。

① 『合補』には『合集』に載せられていない甲骨片のうち、『英国』と『小屯南地甲骨』以外については大半が載せられているので『合補』で代用した。なお、『小屯南地甲骨』については、第五期黄組が含まれないので、実質的に本稿の対象外となった。

② 黄河沿岸は、『孟子』離婁下に「七八月の間、雨集し、溝澮皆な盈つ」とあるように、雨季乾季が存在するが、甲骨文では降雨に関する占卜は全ての月に見られることから、「降雨の可能性の少ない乾燥期に於いて、なほ之を卜しているのは甚だ奇異である」とする。確かに黄河下流の沿岸地域は現在でも雨季乾季が存在するが、乾季にも一ヶ月に平均数ミリ程度の降水量があり、月次が太陽暦に対して移動していた根拠にはならない。また、甲骨文の「○旬○日」と記す例を挙げ、これを「将来の月名を適確に謂うことが困難である」ためとするが、島氏が挙げたのは占卜に対し

てそれが実際に起こったかどうかを記す験辞であるから、暦が未定であることの根拠にはならない。むしろ、験辞であつても月次と干支ではなく「〇旬〇日、××あり」のように日数を記すことが通例であるから、月次の不記を元に月次の移動を論じることとはできない。

③ 正確には姦に口を加えた文字（𦍋）であるが、表記には「姦」を用いる。

④ 一般に「五祀」と呼ばれるが、股末には年次を「祀」と呼び、五年目を示す「雉れ王の五祀」の「五祀」と混同するので、本稿では「五種祭祀」と表記する。

⑤ 『殷王世系研究』第三章五節参照。周祭で祀られた配妣は十七名であるが、誤刻によつて五名余分に見える。誤刻の配妣はそれぞれ一例ずつと少なく、また第三期までに祀られていないことから誤刻と判断できる。

⑥ 島邦男氏は、後に「帝辛三十三年股亡説」『甲骨学』十一、一九六七（年）では股の滅亡を帝辛三十三年とする。

⑦ 『よみがえる文字と呪術の帝国』（中央公論新社、二〇〇一年）七十三頁。

⑧ 現在における値であるが、約三千年前の股代でも数値上で大きな変化はない。

⑨ 合集35400＝『総集』は「……」とするが、「三月」である。合集35603＝『総集』は「60癸亥卜」の条に「31甲午……（欠）……」とするが、「甲午……」ではなく「在十（月）……」である。合集35712＝『総集』は「21甲申、祭上甲」「01甲子、𦍋大甲」とするが祭祀間隔が不自然であり、「𦍋」と「大甲」の間には甲骨片の欠落があるので、「𦍋（小甲、姦）大甲」であろう。合集35741＝『総集』は八月とするが、九月の誤釈である。合集3531＝『総集』は二条載せるが、3530の末尾条を3533とする編集ミスである。合集35374＝『総集』は41甲辰の条を「翌無」とするが、正しくは「翌小甲」である。合集35375＝『総集』は二条載せるが、3576の第一条を3575とする編集ミスである。合集35380＝『総集』は「𦍋……大甲」とするが、間に「小」が見えるので、「𦍋小（甲、姦）大甲」である。合集35381＝『総集』は二月21甲申、四月31甲午、四月41甲辰とするが、四月は三月の誤釈である。合集35382＝『総集』は「……小甲、姦大乙」と読むが、「大乙」は「大甲」の誤釈である。また、同片の記時を三月41甲辰、五月11甲戌とするが、三月は四月の誤釈である。合集35674＝『総集』は下段から「九月11甲戌、翌癸甲」「九月21甲申、翌癸甲」「九月31甲午、翌癸甲」とするが、甲午の条の「癸甲」は象甲の誤釈である。合集35675＝『総集』釈文は十一月とするが十月の誤釈である（模本は十月になつて

おり正しい。『合集3595a』『総集』は下段から十一月21甲申、十月31甲午、十一月41甲辰とするが、十月は十一月（十月一）の誤釈である。『合集3595b』『総集』は十月01甲子条を「飠大甲、𠂔𠂔甲」とするが、「飠𠂔甲、𠂔𠂔甲」の誤釈である。『合集3595c』『総集』は「四月31甲寅、𠂔𠂔甲、𠂔𠂔甲」とするが、「𠂔𠂔甲」の誤釈である（『合補0367』釈文を参照）。『合集3595d』『総集』は「四月31甲寅、𠂔𠂔甲、𠂔𠂔甲」とする。

前条は月次が不明瞭（『合補1278』釈文は三月とする）。後条は𠂔𠂔甲の誤釈である（『合補1278』釈文を参照）。『合集3597a』『総集』は祖乙の祭祀を「翌」と読むが、五種祭祀の翌とは字体が異なっており、周祭祀時ではない。『合集3597b』『総集』は又の左下の二点を「二」と読み「十月又二」とするが、「二」は文字ではなく、又の後は甲骨片の欠落部分であろう。『合集3597c』『総集』は「雍己、𠂔𠂔甲」と読むが、正しくは甲申の甲が欠落した「甲」申、𠂔𠂔甲である。『合集3597d』『総集』は「祭𠂔象甲」と読むが、祖甲（文字が逆向き）が見落とされており、正しくは「祭祖甲、𠂔象甲」である。また、その前条を模本は三月、釈文は四月とするが、不明瞭である。『合集3598a』『総集』は「二月」とするが月次は不明瞭である。『合集3599a』『総集』は「𠂔多祖甲」と読むが、𠂔は次条の工典のものである。『合集3599b』『総集』は「二祀」とするが不明瞭であり、二または三祀のどちらかである。『合集3599c』『総集』は21甲申条を「十月又一」と読むが、「十月又二」の誤釈である。『合集3599d』『総集』は八月とするが九月の誤釈である（同文の『合集3599e』を参照）。『合集3599f』『総集』は「十月」とするが、次行頭に「一」が見えるので十一月（十月一）である。英国3599g『総集』は「21甲申、大甲」「31甲午、祭上甲」と読むが、「大甲」ではなく「大占（吉の下半分が欠落）」の誤釈である。なお、以上は暦譜復元に影響しない程度のもので省いており、例えば『合集3599h』について、総集は九月31甲寅条を「一（欠）：𠂔𠂔甲」とし、実際は「祭𠂔甲、𠂔𠂔甲」が判読できるが、𠂔甲の祭と𠂔甲の飠が同日であるのは自明であるので省いた。

- ⑩ 本稿は模本のみのもので使用しておらず、また『研究』以降に利用できるようになった甲骨片を用いているので、若干の出入りがあるが、約九十片が『研究』と共通する。

- ⑪ 「20癸未トして貞う、王旬に尤亡きか、王占いみて曰く、大吉」と四月に在り（『合集3599i』）のように、甲日の祭祀が記されなくても月次が記される場合があることから証される。

- ⑫ 甲骨文では、「期」が異なると貞人を含め現れる人名が入れ替わり、支持勢力が交代していることから擬制的血縁関係が読みとられる。また、「期」

が交代することにより殷王世系に対する認識にも若干の変化が現れる。詳しくは『殷王世系研究』第四・五章参照。

⑬ 『殷王世系研究』第二章五節参照。丁祭は近親直系王に対して行われる祭祀である。

⑭ 合補10942 (合集35424 + 合集35534) ≡ 卷末表Bではいずれも帝辛一祀に収まる。合補10943 (合集35529 + 合集37840) ≡ いずれも帝辛三祀。合補10948 (合集35423 + 英国2505) ≡ いずれも帝辛三祀。合補10949 (合集35409 + 合集35416) ≡ いずれも帝辛六祀。合補10958 (英国2503 + 「王八祀」片) ≡ 卷末表Bでは英国2503は七祀に当たり適合しないが、前述のように、合補10958の綴合は文字の中央線がずれており不適切である。合補10962 (合集35592 + 合集38274 (五月10癸酉)) ≡ いずれも帝辛三祀。合補10964 (合集35527 + 合集37941) ≡ 合集37941は干支が欠落しているため確認できない。合補10969 (合集35585 + 合集35649) ≡ 合集35585は干支が欠落しているため確認できない。合補10970 (合集35588 + 合集35758) ≡ いずれも帝辛二祀。合補10986 (合集35699 + 合集35887) ≡ いずれも帝辛十三祀。合補10987 (合集35653 + 合集35752) ≡ いずれも文武丁十五祀。合補1002 (合集35422 + 合集37846) ≡ いずれも帝辛七祀。合補11003 (合集35751 + 合集35884) ≡ いずれも文武丁十五祀。合補11038 (合補は合集の模本の番号を記載しているが拓本は英国2512 + 英国2513) ≡ いずれも帝辛一祀。以上のように、綴合された片でも月・干支の矛盾がなく同年に収まり、復元の正確さを傍証するものとなった。なお、『殷墟卜辞研究』の暦譜復元では、合補10942・10943・10948・10962・10970・10986・11003については両方または片方の片が用いられていないため確認できず、確認できる合補10987・合補11038については両者ともに二片を別の年次に編入しており、合補10987では合集35653 (『殷契粹編』1464) を帝辛十三祀、合集35752 (『亀甲獸骨文字』2.14.4) を帝辛二十祀とし、合補11038では英国2512 (『庫方二氏藏甲骨卜辞』1619) を帝辛二祀、英国2513 (『金璋所藏甲骨卜辞』334) を帝辛一祀とし、『研究』の復元が不正確であることを示している (『研究』一五四～一五五、一六九～一七〇頁)。

⑮ 地球と各惑星の最接近から次の再接近までの周期。地球より外側を公転する外惑星の場合、最離遠時には惑星は太陽の裏側になり、最接近時には太陽・地球・惑星の順で直線になるので、外惑星の会合周期は地球上で太陽に対して一回転遅れる周期として観測される。なお、マヤ文明の宗教暦で七九・九日の半分の三九〇日ではなく、三分の一である二六〇日を用いられたのは、三六五日の近似である三六四日との最大公約数が五十二となり、宗教暦と常用暦の組合せによって日付に宗教上の意義を持たせるためであると考えられ、マヤ文明では五十二は聖数とされ、五十二

の倍数の遺物が見られる。

- ⑮ この五器の祭祀対象はすべて王典か直系王であり、このことから五器の記時の信頼性を認めることができる。なお、二祀御卣については二祀正月53丙辰に大乙妣丙の多(多三句)を記すが、周祭曆では帝辛二祀五月53丙辰多四句に当たり一句ずれるだけであり、豊彝についても六祀22乙酉に武乙の多(多十一句)を記すが、周祭曆では帝辛六祀八月22乙酉多十句に当たり一句ずれるだけであり、いずれも正確ではないが近い記時である。

- ⑯ 西周の冊命金文の記時については、王廷での儀礼が記され、また王側の記録官も金文中に見えるので、殷代の金文よりは信頼できるとあろう。

- ⑰ 『殷墟卜辞綜述』三〇一―三〇四頁。

- ⑱ イ・大・甫に従う字形であり「衡」とは異なるが、これに当たる文字がないため、比較的字形の近い「衡」で代用した。

- ⑳ 第一期竇組では貞人署名五二九八片中、貞人名として王が見えるのは五一四片であり、同じく第二期出組では三二五四片中に六二五片、第三期何組では七二三片中に十二片である(『殷墟甲骨刻辞類纂』(中華書局、一九八九年)による)。

(本学大学院博士後期課程修了)

卷末表B

帝辛15祀

月	干支	周祭	番号	
4	21甲申	𠄎1旬		
4	31甲午	𠄎2旬		
5	41甲辰	𠄎3旬		
5	51甲寅	𠄎4旬		
5	01甲子	𠄎5旬		
6	11甲戌	𠄎6旬		
6	21甲申	𠄎7旬		
6	31甲午	𠄎8旬		
7	41甲辰	𠄎9旬		
7	51甲寅	𠄎10旬		
7	01甲子	𠄎11旬		
8	11甲戌	𠄎1旬		
8	21甲申	𠄎2旬		
8	31甲午	𠄎3旬		
9	41甲辰	𠄎4旬		
9	51甲寅	𠄎5旬		
9	01甲子	𠄎6旬		
10	11甲戌	𠄎7旬		
10	21甲申	𠄎8旬		
10	31甲午	𠄎9旬		
11	41甲辰	𠄎10旬		
11	51甲寅	𠄎11旬		
11	01甲子			
12	11甲戌	●閏旬		
12	21甲申	翌1旬		
12	31甲午	翌2旬		
①	41甲辰	翌3旬		
①	51甲寅	翌4旬		
2	01甲子	翌5旬		
2	11甲戌	翌6旬		
2	21甲申	翌7旬		
3	31甲午	翌8旬		
3	41甲辰	翌9旬		
3	51甲寅	翌10旬		
4	01甲子	翌11旬		
4	11甲戌	祭1旬		
4	21甲申	飫1旬		

帝辛16祀

月	干支	周祭	番号	
5	31甲午	𠄎1旬		
5	41甲辰	𠄎2旬		
5	51甲寅	𠄎3旬		
6	01甲子	𠄎4旬		
6	11甲戌	𠄎5旬		
6	21甲申	𠄎6旬		
7	31甲午	𠄎7旬		
7	41甲辰	𠄎8旬		
7	51甲寅	𠄎9旬	35893	
8	01甲子	𠄎10旬	35893	
8	11甲戌	𠄎11旬		
8	21甲申	𠄎1旬		
9	31甲午	𠄎2旬		
9	41甲辰	𠄎3旬		
9	51甲寅	𠄎4旬		
10	01甲子	𠄎5旬		
10	11甲戌	𠄎6旬	35662	
10	21甲申	𠄎7旬		
11	31甲午	𠄎8旬		
11	41甲辰	𠄎9旬		
11	51甲寅	𠄎10旬		
12	01甲子	𠄎11旬		
12	11甲戌			
12	21甲申	翌1旬		
1	31甲午	翌2旬		
1	41甲辰	翌3旬		
1	51甲寅	翌4旬		
2	01甲子	翌5旬		
2	11甲戌	翌6旬		
2	21甲申	翌7旬		
3	31甲午	翌8旬		
3	41甲辰	翌9旬		
3	51甲寅	翌10旬		
4	01甲子	翌11旬		
4	11甲戌	祭1旬		
4	21甲申	飫1旬		

卷末表B

帝辛13祀

月	干支	周祭	番号	
3	11甲戌	荔1旬		
4	21甲申	荔2旬		
4	31甲午	荔3旬		
4	41甲辰	荔4旬		
5	51甲寅	荔5旬	35699	
5	01甲子	荔6旬	35887	
5	11甲戌	荔7旬		
6	21甲申	荔8旬	35887	
6	31甲午	荔9旬	35887	
6	41甲辰	荔10旬		
7	51甲寅	荔11旬		
7	01甲子	多1旬		
7	11甲戌	多2旬		
8	21甲申	多3旬		
8	31甲午	多4旬		
8	41甲辰	多5旬		
9	51甲寅	多6旬		
9	01甲子	多7旬		
9	11甲戌	多8旬		
10	21甲申	多9旬		
10	31甲午	多10旬		
10	41甲辰	多11旬		
11	51甲寅			
11	01甲子	●閏旬		
11	11甲戌	翌1旬		
12	21甲申	翌2旬		
12	31甲午	翌3旬		
12	41甲辰	翌4旬		
1	51甲寅	翌5旬		
1	01甲子	翌6旬	35693	
1	11甲戌	翌7旬		
2	21甲申	翌8旬	35741	
2	31甲午	翌9旬	35741	
2	41甲辰	翌10旬	35741	
3	51甲寅	翌11旬		
3	01甲子	祭1旬		
3	11甲戌	觚1旬		

殷末曆譜の復元

七五

帝辛14祀

月	干支	周祭	番号	
④	21甲申	荔1旬		
④	31甲午	荔2旬		
5	41甲辰	荔3旬		
5	51甲寅	荔4旬		
5	01甲子	荔5旬		
6	11甲戌	荔6旬		
6	21甲申	荔7旬		
6	31甲午	荔8旬		
7	41甲辰	荔9旬		
7	51甲寅	荔10旬		
7	01甲子	荔11旬		
8	11甲戌	多1旬		
8	21甲申	多2旬		
8	31甲午	多3旬		
9	41甲辰	多4旬		
9	51甲寅	多5旬		
9	01甲子	多6旬		
10	11甲戌	多7旬		
10	21甲申	多8旬		
10	31甲午	多9旬		
11	41甲辰	多10旬		
11	51甲寅	多11旬		
11	01甲子			
12	11甲戌	翌1旬		
12	21甲申	翌2旬		
12	31甲午	翌3旬		
1	41甲辰	翌4旬		
1	51甲寅	翌5旬		
1	01甲子	翌6旬		
2	11甲戌	翌7旬		
2	21甲申	翌8旬		
2	31甲午	翌9旬		
3	41甲辰	翌10旬		
3	51甲寅	翌11旬		
3	01甲子	祭1旬		
4	11甲戌	觚1旬		

卷末表B

帝辛11祀

月	干支	周祭	番号	
3	01甲子	祭1旬	35410	
3	11甲戌	祭2旬		
3	21甲申	祭3旬		
4	31甲午	祭4旬	35576	
4	41甲辰	祭5旬	35576	
4	51甲寅	祭6旬	35576	
5	01甲子	祭7旬		
5	11甲戌	祭8旬		
5	21甲申	祭9旬		
6	31甲午	祭10旬		
6	41甲辰	祭11旬		
6	51甲寅	飫11旬		
7	01甲子	𠄎11旬		
7	11甲戌	𠄎1旬		
7	21甲申	𠄎2旬		
8	31甲午	𠄎3旬		
8	41甲辰	𠄎4旬		
8	51甲寅	𠄎5旬		
9	01甲子	𠄎6旬		
9	11甲戌	𠄎7旬		
9	21甲申	𠄎8旬		
10	31甲午	𠄎9旬		
10	41甲辰	𠄎10旬		
10	51甲寅	𠄎11旬		
11	01甲子			
11	11甲戌	翌1旬		
11	21甲申	翌2旬		
12	31甲午	翌3旬		
12	41甲辰	翌4旬		
12	51甲寅	翌5旬		
1	01甲子	翌6旬		
1	11甲戌	翌7旬		
1	21甲申	翌8旬		
2	31甲午	翌9旬		
2	41甲辰	翌10旬		
2	51甲寅	翌11旬		

帝辛12祀

月	干支	周祭	番号	
3	01甲子	●閏旬		
3	11甲戌	祭1旬		
3	21甲申	祭2旬		
4	31甲午	祭3旬		
4	41甲辰	祭4旬		
4	51甲寅	祭5旬		
5	01甲子	祭6旬		
5	11甲戌	祭7旬		
5	21甲申	祭8旬		
6	31甲午	祭9旬		
6	41甲辰	祭10旬		
6	51甲寅	祭11旬		
⑦	01甲子	飫11旬		
⑦	11甲戌	𠄎11旬		
8	21甲申	𠄎1旬		
8	31甲午	𠄎2旬		
8	41甲辰	𠄎3旬		
9	51甲寅	𠄎4旬		
9	01甲子	𠄎5旬		
9	11甲戌	𠄎6旬		
10	21甲申	𠄎7旬	35703	
10	31甲午	𠄎8旬		
10	41甲辰	𠄎9旬		
11	51甲寅	𠄎10旬	35897	
11	01甲子	𠄎11旬		
11	11甲戌			
12	21甲申	翌1旬		
12	31甲午	翌2旬		
12	41甲辰	翌3旬		
1	51甲寅	翌4旬		
1	01甲子	翌5旬		
1	11甲戌	翌6旬		
2	21甲申	翌7旬		
2	31甲午	翌8旬		
2	41甲辰	翌9旬		
3	51甲寅	翌10旬		
3	01甲子	翌11旬		

卷末表B

帝辛9祀

月	干支	周祭	番号	
2	51甲寅	祭1旬		
2	01甲子	祭2旬		
3	11甲戌	祭3旬		
3	21甲申	祭4旬	35532	
3	31甲午	祭5旬		
4	41甲辰	祭6旬		
4	51甲寅	祭7旬	35698	
4	01甲子	祭8旬	35698	
5	11甲戌	祭9旬	35886	
5	21甲申	祭10旬	35886	
5	31甲午	祭11旬		
6	41甲辰	飠11旬		
6	51甲寅	𩇛11旬		
6	01甲子	𩇛1旬		
7	11甲戌	𩇛2旬		
7	21甲申	𩇛3旬		
7	31甲午	𩇛4旬		
8	41甲辰	𩇛5旬		
8	51甲寅	𩇛6旬		
8	01甲子	𩇛7旬		
9	11甲戌	𩇛8旬		
9	21甲申	𩇛9旬		
9	31甲午	𩇛10旬		
10	41甲辰	𩇛11旬		
10	51甲寅			
10	01甲子	翌1旬		
11	11甲戌	翌2旬		
11	21甲申	翌3旬		
11	31甲午	翌4旬		
12	41甲辰	翌5旬		
12	51甲寅	翌6旬		
12	01甲子	翌7旬		
1	11甲戌	翌8旬		
1	21甲申	翌9旬		
1	31甲午	翌10旬		
2	41甲辰	翌11旬		

帝辛10祀

月	干支	周祭	番号	
2	51甲寅	●閏旬		
2	01甲子	祭1旬		
3	11甲戌	祭2旬		
3	21甲申	祭3旬		
3	31甲午	祭4旬		
4	41甲辰	祭5旬	35582	
4	51甲寅	祭6旬		
4	01甲子	祭7旬		
5	11甲戌	祭8旬	35582	
5	21甲申	祭9旬		
5	31甲午	祭10旬		
6	41甲辰	祭11旬		
6	51甲寅	飠11旬		
6	01甲子	𩇛11旬		
7	11甲戌	𩇛1旬		
7	21甲申	𩇛2旬		
7	31甲午	𩇛3旬		
8	41甲辰	𩇛4旬		
8	51甲寅	𩇛5旬		
8	01甲子	𩇛6旬		
⑨	11甲戌	𩇛7旬		
⑨	21甲申	𩇛8旬		
10	31甲午	𩇛9旬		
10	41甲辰	𩇛10旬		
10	51甲寅	𩇛11旬		
11	01甲子			
11	11甲戌	翌1旬		
11	21甲申	翌2旬		
12	31甲午	翌3旬	35574	
12	41甲辰	翌4旬	35574	
12	51甲寅	翌5旬	35574	
1	01甲子	翌6旬	35574	
1	11甲戌	翌7旬		
1	21甲申	翌8旬		
2	31甲午	翌9旬		
2	41甲辰	翌10旬		
2	51甲寅	翌11旬		

卷末表B

帝辛7祀

月	干支	周祭	番号	
1	41甲辰	祭1旬		
1	51甲寅	祭2旬		
2	01甲子	祭3旬		35745
2	11甲戌	祭4旬	b2503	
2	21甲申	祭5旬	b2503	35745
③	31甲午	祭6旬	b2503	
③	41甲辰	祭7旬	b2503	
4	51甲寅	祭8旬	b2503	
4	01甲子	祭9旬	b2503	
4	11甲戌	祭10旬	b2503	
5	21甲申	祭11旬	37846	
5	31甲午	飠11旬	37846	
5	41甲辰	嘉11旬	35422	
6	51甲寅	𠔁1旬	35422	
6	01甲子	𠔁2旬	35422	
6	11甲戌	𠔁3旬		
7	21甲申	𠔁4旬		
7	31甲午	𠔁5旬		
7	41甲辰	𠔁6旬		
8	51甲寅	𠔁7旬	35706	
8	01甲子	𠔁8旬	35706	
8	11甲戌	𠔁9旬	35706	
9	21甲申	𠔁10旬	35706	
9	31甲午	𠔁11旬	35706	
9	41甲辰		35401	
10	51甲寅	翌1旬	35401	
10	01甲子	翌2旬	36511	征盂方
10	11甲戌	翌3旬		
11	21甲申	翌4旬		
11	31甲午	翌5旬		
11	41甲辰	翌6旬		
12	51甲寅	翌7旬		
12	01甲子	翌8旬		
12	11甲戌	翌9旬		
1	21甲申	翌10旬		
1	31甲午	翌11旬		

帝辛8祀

月	干支	周祭	番号	
1	41甲辰	●閏旬		
2	51甲寅	祭1旬		
2	01甲子	祭2旬		
2	11甲戌	祭3旬		
3	21甲申	祭4旬	36509	来盂方
3	31甲午	祭5旬		
3	41甲辰	祭6旬		
4	51甲寅	祭7旬		
4	01甲子	祭8旬		
4	11甲戌	祭9旬		
5	21甲申	祭10旬		
5	31甲午	祭11旬		
5	41甲辰	飠11旬	36516	来盂方
6	51甲寅	嘉11旬		
6	01甲子	𠔁1旬		
6	11甲戌	𠔁2旬		
7	21甲申	𠔁3旬		
7	31甲午	𠔁4旬		
7	41甲辰	𠔁5旬		
8	51甲寅	𠔁6旬	37849	
8	01甲子	𠔁7旬		
8	11甲戌	𠔁8旬		
9	21甲申	𠔁9旬		
9	31甲午	𠔁10旬		
9	41甲辰	𠔁11旬		
10	51甲寅			
10	01甲子	翌1旬		
10	11甲戌	翌2旬		
11	21甲申	翌3旬	35646	35525
11	31甲午	翌4旬	35646	
11	41甲辰	翌5旬	35646	
⑫	51甲寅	翌6旬		
⑫	01甲子	翌7旬		
1	11甲戌	翌8旬		
1	21甲申	翌9旬		
1	31甲午	翌10旬		
2	41甲辰	翌11旬		

卷末表B

帝辛5祀

月	干支	周祭	番号	
12	31甲午	祭1句	35412	
1	41甲辰	祭2句	35412	
1	51甲寅	祭3句		
1	01甲子	祭4句		
2	11甲戌	祭5句		
2	21甲申	祭6句		
2	31甲午	祭7句		
3	41甲辰	祭8句		
3	51甲寅	祭9句		
3	01甲子	祭10句		
4	11甲戌	祭11句		
4	21甲申	飪11句		
4	31甲午	嘉11句		
⑤	41甲辰	𠄎1句		
⑤	51甲寅	𠄎2句		
6	01甲子	𠄎3句		
6	11甲戌	𠄎4句		
6	21甲申	𠄎5句		
7	31甲午	𠄎6句		
7	41甲辰	𠄎7句		
7	51甲寅	𠄎8句		
8	01甲子	𠄎9句		
8	11甲戌	𠄎10句		
8	21甲申	𠄎11句		
9	31甲午		37844	37843
9	41甲辰	翌1句		
9	51甲寅	翌2句		
10	01甲子	翌3句		
10	11甲戌	翌4句		
10	21甲申	翌5句		
11	31甲午	翌6句		
11	41甲辰	翌7句		
11	51甲寅	翌8句		
12	01甲子	翌9句		
12	11甲戌	翌10句		
12	21甲申	翌11句		

殷末曆譜の復元

七九

帝辛6祀

月	干支	周祭	番号	
1	31甲午	●閏句		
1	41甲辰	祭1句	35409	
1	51甲寅	祭2句	35416	
2	01甲子	祭3句		
2	11甲戌	祭4句	35416	
2	21甲申	祭5句	35581	
3	31甲午	祭6句	35581	
3	41甲辰	祭7句	35581	35749
3	51甲寅	祭8句		35749
4	01甲子	祭9句		35749
4	11甲戌	祭10句		35749
4	21甲申	祭11句		
5	31甲午	飪11句		
5	41甲辰	嘉11句		
5	51甲寅	𠄎1句		
6	01甲子	𠄎2句		
6	11甲戌	𠄎3句		
6	21甲申	𠄎4句		
7	31甲午	𠄎5句		
7	41甲辰	𠄎6句		
7	51甲寅	𠄎7句		
8	01甲子	𠄎8句	35757	
8	11甲戌	𠄎9句		
8	21甲申	𠄎10句		
9	31甲午	𠄎11句	35399	
9	41甲辰		35399	
9	51甲寅	翌1句	35399	35402
10	01甲子	翌2句		35402
10	11甲戌	翌3句		35402
10	21甲申	翌4句	b2508	35402
11	31甲午	翌5句		
11	41甲辰	翌6句	b2508	35647
11	51甲寅	翌7句	35695	
12	01甲子	翌8句	35695	35745
12	11甲戌	翌9句	37845	
12	21甲申	翌10句	37845	35745
1	31甲午	翌11句		

卷末表B

帝辛3祀

月	干支	周祭	番号		
11	11甲戌	●閏旬	37840		
12	21甲申	祭1旬	37840	35411	
12	31甲午	祭2旬	37840		
12	41甲辰	祭3旬	35529	35411	
1	51甲寅	祭4旬	35529		
1	01甲子	祭5旬		35411	
1	11甲戌	祭6旬	35650		
2	21甲申	祭7旬			
2	31甲午	祭8旬			
2	41甲辰	祭9旬			
3	51甲寅	祭10旬			
3	01甲子	祭11旬			
3	11甲戌	飫11旬		35892	
4	21甲申	嘉11旬			
4	31甲午	𠄎1旬	35423		
4	41甲辰	𠄎2旬	b2505		35590
5	51甲寅	𠄎3旬	b2505	35892	
5	01甲子	𠄎4旬	b2505		35590
5	11甲戌	𠄎5旬			
6	21甲申	𠄎6旬			35660
6	31甲午	𠄎7旬	37838		
6	41甲辰	𠄎8旬	35756		
7	51甲寅	𠄎9旬	35756		
7	01甲子	𠄎10旬	35756		
7	11甲戌	𠄎11旬			
⑧	21甲申		35756	35398	35660
⑧	31甲午	翌1旬	35756	35398	
9	41甲辰	翌2旬			
9	51甲寅	翌3旬			
9	01甲子	翌4旬			
10	11甲戌	翌5旬			
10	21甲申	翌6旬			
10	31甲午	翌7旬			
11	41甲辰	翌8旬			
11	51甲寅	翌9旬	35883		
11	01甲子	翌10旬	35883		
12	11甲戌	翌11旬	35407		

帝辛4祀

月	干支	周祭	番号
12	21甲申	祭1旬	35407
12	31甲午	祭2旬	
1	41甲辰	祭3旬	35407
1	51甲寅	祭4旬	
1	01甲子	祭5旬	35580
2	11甲戌	祭6旬	
2	21甲申	祭7旬	
2	31甲午	祭8旬	
3	41甲辰	祭9旬	
3	51甲寅	祭10旬	
3	01甲子	祭11旬	
4	11甲戌	飫11旬	
4	21甲申	嘉11旬	
4	31甲午	●閏旬	a10944
5	41甲辰	𠄎1旬	
5	51甲寅	𠄎2旬	35589
5	01甲子	𠄎3旬	35589
6	11甲戌	𠄎4旬	35589
6	21甲申	𠄎5旬	
6	31甲午	𠄎6旬	35589
7	41甲辰	𠄎7旬	35589
7	51甲寅	𠄎8旬	37839
7	01甲子	𠄎9旬	a11043
8	11甲戌	𠄎10旬	a11043
8	21甲申	𠄎11旬	a11043
8	31甲午		
9	41甲辰	翌1旬	a11043
9	51甲寅	翌2旬	a11043
9	01甲子	翌3旬	
10	11甲戌	翌4旬	35573
10	21甲申	翌5旬	
10	31甲午	翌6旬	35645
11	41甲辰	翌7旬	35645
11	51甲寅	翌8旬	
11	01甲子	翌9旬	
12	11甲戌	翌10旬	
12	21甲申	翌11旬	

卷末表B

帝辛1祀(帝辛口祀)

月	干支	周祭	番号		
11	01甲子	●閏旬			
11	11甲戌	祭1旬			
11	21甲申	祭2旬			
12	31甲午	祭3旬			
12	41甲辰	祭4旬			
12	51甲寅	祭5旬			
1	01甲子	祭6旬		b2510	
1	11甲戌	祭7旬		b2510	
1	21甲申	祭8旬	35748	b2510	
2	31甲午	祭9旬	35748		
2	41甲辰	祭10旬	35885	b2512	
2	51甲寅	祭11旬	35885	b2513	
3	01甲子	祭11旬	35885	b2513	
3	11甲戌	祭11旬	37865	b2513	
3	21甲申	祭1旬	35424	b2513	
4	31甲午	祭2旬	35534		
4	41甲辰	祭3旬	35534		
4	51甲寅	祭4旬	35534		
5	01甲子	祭5旬	35534		
5	11甲戌	祭6旬	35659		
5	21甲申	祭7旬			
6	31甲午	祭8旬			
6	41甲辰	祭9旬			
6	51甲寅	祭10旬	a11032		
7	01甲子	祭11旬	a11032		
7	11甲戌	翌1旬	35397		
7	21甲申	この間に 空き1旬			
8	31甲午				
8	41甲辰				
8	51甲寅	翌4旬	35641		
9	01甲子	翌5旬	35641		
9	11甲戌	翌6旬	35641	35644	
9	21甲申	翌7旬	35641	35644	37863
⑩	31甲午	翌8旬		35644	37863
⑩	41甲辰	翌9旬		35644	
11	51甲寅	翌10旬			
11	01甲子	翌11旬			

帝辛2祀

月	干支	周祭	番号
11	11甲戌	祭1旬	35414
12	21甲申	祭2旬	35530
12	31甲午	祭3旬	35530
12	41甲辰	祭4旬	35530
1	51甲寅	祭5旬	35530
1	01甲子	祭6旬	35530
1	11甲戌	祭7旬	
2	21甲申	祭8旬	
2	31甲午	祭9旬	
2	41甲辰	祭10旬	
3	51甲寅	祭11旬	
3	01甲子	祭11旬	
3	11甲戌	祭11旬	37836
4	21甲申	祭1旬	
4	31甲午	祭2旬	
4	41甲辰	祭3旬	
5	51甲寅	祭4旬	35588
5	01甲子	祭5旬	
5	11甲戌	祭6旬	
6	21甲申	祭7旬	
6	31甲午	祭8旬	35758
6	41甲辰	祭9旬	35758
7	51甲寅	祭10旬	
7	01甲子	祭11旬	
7	11甲戌		
8	21甲申	翌1旬	
8	31甲午	翌2旬	
8	41甲辰	翌3旬	
9	51甲寅	翌4旬	
9	01甲子	翌5旬	
9	11甲戌	翌6旬	
10	21甲申	翌7旬	35694
10	31甲午	翌8旬	
10	41甲辰	翌9旬	
11	51甲寅	翌10旬	
11	01甲子	翌11旬	

卷末表B

文武丁15祀

月	干支	周祭	番号	
10	51甲寅	祭1旬	a10952	
10	01甲子	祭2旬		
11	11甲戌	祭3旬		
11	21甲申	祭4旬		
11	31甲午	祭5旬		
12	41甲辰	祭6旬		
12	51甲寅	祭7旬	35653	
12	01甲子	祭8旬		
1	11甲戌	祭9旬	35752	35751
1	21甲申	祭10旬	35752	35884
1	31甲午	飪10旬		
2	41甲辰	飪10旬	35891	
2	51甲寅	●閏旬	35891	
2	01甲子	𠄎1旬		
3	11甲戌	𠄎2旬		
3	21甲申	𠄎3旬		
3	31甲午	𠄎4旬		
4	41甲辰	𠄎5旬		
4	51甲寅	𠄎6旬	35656	
4	01甲子	𠄎7旬	35656	
5	11甲戌	𠄎8旬		
5	21甲申	𠄎9旬		
5	31甲午	𠄎10旬		
6	41甲辰	翌1旬		
6	51甲寅	翌2旬		
6	01甲子	翌3旬		
7	11甲戌	翌4旬		
7	21甲申	翌5旬		
7	31甲午	翌6旬		
8	41甲辰	翌7旬		
8	51甲寅	翌8旬	35744	
8	01甲子	翌9旬		
9	11甲戌	翌10旬		
9	21甲申			
9	31甲午			
10	41甲辰			
10	51甲寅			

文武丁16祀 (帝辛口祀)

月	干支	周祭	番号	
10	01甲子	祭1旬		
11	11甲戌	祭2旬		
11	21甲申	祭3旬		
11	31甲午	祭4旬		
12	41甲辰	祭5旬		
12	51甲寅	祭6旬		
12	01甲子	祭7旬		
①	11甲戌	祭8旬		
①	21甲申	祭9旬		
2	31甲午	祭10旬		
2	41甲辰	飪10旬		
2	51甲寅	飪10旬	a10945	37864
3	01甲子	𠄎1旬	a10945	
3	11甲戌	𠄎2旬	a10945	
3	21甲申	𠄎3旬		
4	31甲午	𠄎4旬	35586	
4	41甲辰	𠄎5旬		
4	51甲寅	𠄎6旬	35657	
5	01甲子	𠄎7旬	35657	
5	11甲戌	𠄎8旬		
5	21甲申	𠄎9旬		
6	31甲午	𠄎10旬	37867	35896
6	41甲辰	𠄎11旬		
6	51甲寅	翌1旬	37867	
7	01甲子	翌2旬		
7	11甲戌	翌3旬	37867	35524
7	21甲申	翌4旬		
8	31甲午	翌5旬		
8	41甲辰	翌6旬		
8	51甲寅	翌7旬	37867	
9	01甲子	翌8旬		
9	11甲戌	翌9旬	37867	
9	21甲申	翌10旬	35856	
10	31甲午	翌11旬		
10	41甲辰		35856	
10	51甲寅			

卷末表B

文武丁13祀

月	干支	周祭	番号	
9	41甲辰	祭1旬		
10	51甲寅	祭2旬		
10	01甲子	祭3旬		
10	11甲戌	祭4旬		
11	21甲申	祭5旬		
11	31甲午	祭6旬		
11	41甲辰	祭7旬		
12	51甲寅	祭8旬		
12	01甲子	祭9旬		
12	11甲戌	祭10旬		
1	21甲申	𠄎10旬		
1	31甲午	𠄎10旬		
1	41甲辰	𠄎1旬		
2	51甲寅	𠄎2旬		
2	01甲子	𠄎3旬		
2	11甲戌	𠄎4旬		
3	21甲申	𠄎5旬		
3	31甲午	𠄎6旬		
3	41甲辰	𠄎7旬		
4	51甲寅	𠄎8旬		
4	01甲子	𠄎9旬		
4	11甲戌	𠄎10旬		
5	21甲申	𠄎1旬		
5	31甲午	𠄎2旬		
5	41甲辰	𠄎3旬		
6	51甲寅	𠄎4旬		
6	01甲子	𠄎5旬		
6	11甲戌	𠄎6旬		
7	21甲申	𠄎7旬		
7	31甲午	𠄎8旬		
7	41甲辰	𠄎9旬		
8	51甲寅	𠄎10旬		
8	01甲子			
8	11甲戌			
9	21甲申			
9	31甲午			

文武丁14祀

月	干支	周祭	番号	
9	41甲辰	●閏旬		
10	51甲寅	祭1旬		
10	01甲子	祭2旬		
10	11甲戌	祭3旬		
11	21甲申	祭4旬		
11	31甲午	祭5旬		
11	41甲辰	祭6旬		
12	51甲寅	祭7旬		
12	01甲子	祭8旬		
12	11甲戌	祭9旬		
1	21甲申	祭10旬		
1	31甲午	𠄎10旬		
1	41甲辰	𠄎10旬		
2	51甲寅	𠄎1旬		
2	01甲子	𠄎2旬		
2	11甲戌	𠄎3旬		
③	21甲申	𠄎4旬		
③	31甲午	𠄎5旬		
4	41甲辰	𠄎6旬	37847	
4	51甲寅	𠄎7旬		
4	01甲子	𠄎8旬		
5	11甲戌	𠄎9旬		
5	21甲申	𠄎10旬		
5	31甲午	𠄎1旬		
6	41甲辰	𠄎2旬		
6	51甲寅	𠄎3旬		
6	01甲子	𠄎4旬		
7	11甲戌	𠄎5旬		
7	21甲申	𠄎6旬		
7	31甲午	𠄎7旬		
8	41甲辰	𠄎8旬		
8	51甲寅	𠄎9旬		
8	01甲子	𠄎10旬		
9	11甲戌			
9	21甲申			
9	31甲午			
10	41甲辰			

卷末表B

文武丁11祀

月	干支	周祭	番号	
9	31甲午	祭1旬	b2504	
9	41甲辰	祭2旬	35417	
9	51甲寅	祭3旬	35528	
10	01甲子	祭4旬		
10	11甲戌	祭5旬		
10	21甲申	祭6旬		
11	31甲午	祭7旬	35701	
11	41甲辰	祭8旬		
11	51甲寅	祭9旬	a11001	
12	01甲子	祭10旬	a11001	
12	11甲戌	飏10旬	a11001	
12	21甲申	飏10旬		
1	31甲午	多1旬		
1	41甲辰	多2旬		
1	51甲寅	多3旬		
2	01甲子	多4旬		
2	11甲戌	多5旬		
2	21甲申	多6旬		
3	31甲午	多7旬		
3	41甲辰	多8旬		
3	51甲寅	多9旬		
4	01甲子	多10旬		
4	11甲戌	翌1旬	35400	
4	21甲申	翌2旬	35400	
5	31甲午	翌3旬	35400	
5	41甲辰	翌4旬		
5	51甲寅	翌5旬		
6	01甲子	翌6旬		
6	11甲戌	翌7旬		
6	21甲申	翌8旬		
7	31甲午	翌9旬		
7	41甲辰	翌10旬		
7	51甲寅			
8	01甲子			
8	11甲戌			
8	21甲申			

文武丁12祀

月	干支	周祭	番号	
9	31甲午	●閏旬		
9	41甲辰	祭1旬		
9	51甲寅	祭2旬		
10	01甲子	祭3旬		
10	11甲戌	祭4旬		
10	21甲申	祭5旬		
11	31甲午	祭6旬		
11	41甲辰	祭7旬		
11	51甲寅	祭8旬		
12	01甲子	祭9旬		
12	11甲戌	祭10旬		
12	21甲申	飏10旬		
1	31甲午	飏10旬		
1	41甲辰	多1旬	35425	
1	51甲寅	多2旬		
2	01甲子	多3旬		
2	11甲戌	多4旬		
2	21甲申	多5旬		
3	31甲午	多6旬		
3	41甲辰	多7旬		
3	51甲寅	多8旬		
4	01甲子	多9旬		
4	11甲戌	多10旬		
4	21甲申	翌1旬		
5	31甲午	翌2旬		
5	41甲辰	翌3旬		
5	51甲寅	翌4旬		
⑥	01甲子	翌5旬		
⑥	11甲戌	翌6旬		
7	21甲申	翌7旬		
7	31甲午	翌8旬		
7	41甲辰	翌9旬		
8	51甲寅	翌10旬		
8	01甲子			
8	11甲戌			
9	21甲申			
9	31甲午			

卷末表B

文武丁9祀

月	干支	周祭	番号
8	21甲申	祭1旬	
8	31甲午	祭2旬	
8	41甲辰	祭3旬	
9	51甲寅	祭4旬	
9	01甲子	祭5旬	
9	11甲戌	祭6旬	
10	21甲申	祭7旬	
10	31甲午	祭8旬	
10	41甲辰	祭9旬	
⑪	51甲寅	祭10旬	
⑪	01甲子	飏10旬	
12	11甲戌	飏10旬	
12	21甲申	多1旬	
12	31甲午	多2旬	
1	41甲辰	多3旬	
1	51甲寅	多4旬	37855
1	01甲子	多5旬	
2	11甲戌	多6旬	37852
2	21甲申	多7旬	
2	31甲午	多8旬	
3	41甲辰	多9旬	
3	51甲寅	多10旬	
3	01甲子	翌1旬	
4	11甲戌	翌2旬	
4	21甲申	翌3旬	
4	31甲午	翌4旬	
5	41甲辰	翌5旬	
5	51甲寅	翌6旬	
5	01甲子	翌7旬	
6	11甲戌	翌8旬	
6	21甲申	翌9旬	
6	31甲午	翌10旬	
7	41甲辰		
7	51甲寅		
7	01甲子		
8	11甲戌		

文武丁10祀

月	干支	周祭	番号		
8	21甲申	●閏旬			
8	31甲午	祭1旬			
9	41甲辰	祭2旬	征人方	36482	
9	51甲寅	祭3旬	征人方		
9	01甲子	祭4旬	征人方	60癸亥	
10	11甲戌	祭5旬	征人方		
10	21甲申	祭6旬	征人方	10癸酉	
10	31甲午	祭7旬	征人方	37856	
11	41甲辰	祭8旬	征人方	38辛丑	40癸卯
11	51甲寅	祭9旬	征人方	50癸丑	
11	01甲子	祭10旬	征人方	60癸亥	
12	11甲戌	飏10旬	征人方	06己巳	10癸酉
12	21甲申	飏10旬	征人方	20癸未	30癸巳
12	31甲午	多1旬	征人方	b2563	
1	41甲辰	多2旬	征人方	37庚子	40癸卯
1	51甲寅	多3旬	征人方	43丙午	50癸丑
1	01甲子	多4旬	来入方	60癸亥	
2	11甲戌	多5旬	来入方	10癸酉	
2	21甲申	多6旬	来入方	20癸未	
2	31甲午	多7旬	来入方	30癸巳	
3	41甲辰	多8旬	来入方		
3	51甲寅	多9旬	来入方		
3	01甲子	多10旬	来入方		
4	11甲戌	翌1旬	来入方		
4	21甲申	翌2旬	来入方		
4	31甲午	翌3旬	来入方		
5	41甲辰	翌4旬	来入方	40癸卯	
5	51甲寅	翌5旬	来入方	50癸丑	
5	01甲子	翌6旬			
6	11甲戌	翌7旬			
6	21甲申	翌8旬			
6	31甲午	翌9旬			
7	41甲辰	翌10旬			
7	51甲寅				
7	01甲子				
⑧	11甲戌				
⑧	21甲申		b2504		

* 人方遠征の日付は『殷虚卜辞綜述』による

卷末表B

文武丁7祀

月	干支	周祭	番号	
8	11甲戌	祭1旬		
8	21甲申	祭2旬		
9	31甲午	祭3旬		
9	41甲辰	祭4旬		
9	51甲寅	祭5旬		
10	01甲子	祭6旬		
10	11甲戌	祭7旬		
10	21甲申	祭8旬		
11	31甲午	祭9旬		
11	41甲辰	祭10旬		
11	51甲寅	𠄎10旬		
12	01甲子	𠄎10旬		
12	11甲戌	𠄎1旬		
12	21甲申	𠄎2旬		
閏	31甲午	𠄎3旬		
閏	41甲辰	𠄎4旬		
閏	51甲寅	𠄎5旬		
1	01甲子	𠄎6旬		
1	11甲戌	𠄎7旬		
1	21甲申	𠄎8旬		
②	31甲午	𠄎9旬		
②	41甲辰	𠄎10旬		
3	51甲寅	翌1旬		
3	01甲子	翌2旬		
3	11甲戌	翌3旬		
4	21甲申	翌4旬		
4	31甲午	翌5旬		
4	41甲辰	翌6旬		
5	51甲寅	翌7旬		
5	01甲子	翌8旬		
5	11甲戌	翌9旬		
6	21甲申	翌10旬		
6	31甲午			
6	41甲辰			
7	51甲寅			
7	01甲子			

文武丁8祀

月	干支	周祭	番号	
7	11甲戌	●閏旬		
8	21甲申	祭1旬		
8	31甲午	祭2旬		
8	41甲辰	祭3旬		
9	51甲寅	祭4旬		
9	01甲子	祭5旬		
9	11甲戌	祭6旬		
10	21甲申	祭7旬		
10	31甲午	祭8旬		
10	41甲辰	祭9旬		
11	51甲寅	祭10旬		
11	01甲子	𠄎10旬		
11	11甲戌	𠄎10旬		
12	21甲申	𠄎1旬		
12	31甲午	𠄎2旬		
12	41甲辰	𠄎3旬		
1	51甲寅	𠄎4旬		
1	01甲子	𠄎5旬		
1	11甲戌	𠄎6旬		
2	21甲申	𠄎7旬		
2	31甲午	𠄎8旬		
2	41甲辰	𠄎9旬		
3	51甲寅	𠄎10旬		
3	01甲子	翌1旬		
3	11甲戌	翌2旬		
4	21甲申	翌3旬		
4	31甲午	翌4旬		
4	41甲辰	翌5旬		
5	51甲寅	翌6旬		
5	01甲子	翌7旬		
5	11甲戌	翌8旬		
6	21甲申	翌9旬		
6	31甲午	翌10旬		
6	41甲辰			
7	51甲寅			
7	01甲子			
7	11甲戌			

卷末表B

文武丁5祀

月	干支	周祭	番号	
7	01甲子	祭1旬		
8	11甲戌	祭2旬		
8	21甲申	祭3旬		
8	31甲午	祭4旬		
9	41甲辰	祭5旬		
9	51甲寅	祭6旬		
9	01甲子	祭7旬		
10	11甲戌	祭8旬		
10	21甲申	祭9旬		
10	31甲午	祭10旬		
11	41甲辰	飨10旬		
11	51甲寅	嘉10旬	38306	
11	01甲子	多1旬		
12	11甲戌	多2旬		
12	21甲申	多3旬		
12	31甲午	多4旬		
1	41甲辰	多5旬		
1	51甲寅	多6旬		
1	01甲子	多7旬		
2	11甲戌	多8旬		
2	21甲申	多9旬		
2	31甲午	多10旬		
3	41甲辰	翌1旬		
3	51甲寅	翌2旬		
3	01甲子	翌3旬		
4	11甲戌	翌4旬		
4	21甲申	翌5旬		
4	31甲午	翌6旬		
5	41甲辰	翌7旬		
5	51甲寅	翌8旬		
5	01甲子	翌9旬		
⑥	11甲戌	翌10旬		
⑥	21甲申			
7	31甲午			
7	41甲辰			
7	51甲寅			

文武丁6祀

月	干支	周祭	番号	
8	01甲子	●閏旬		
8	11甲戌	祭1旬		
8	21甲申	祭2旬	35527	
9	31甲午	祭3旬	35527	
9	41甲辰	祭4旬	35527	
9	51甲寅	祭5旬		
10	01甲子	祭6旬	35649	
10	11甲戌	祭7旬	35700	
10	21甲申	祭8旬	35700	
11	31甲午	祭9旬		
11	41甲辰	祭10旬		
11	51甲寅	飨10旬		
12	01甲子	嘉10旬		
12	11甲戌	多1旬		
12	21甲申	多2旬		
1	31甲午	多3旬		
1	41甲辰	多4旬		
1	51甲寅	多5旬		
2	01甲子	多6旬		
2	11甲戌	多7旬		
2	21甲申	多8旬		
3	31甲午	多9旬		
3	41甲辰	多10旬		
3	51甲寅	翌1旬		
4	01甲子	翌2旬		
4	11甲戌	翌3旬		
4	21甲申	翌4旬		
5	31甲午	翌5旬		
5	41甲辰	翌6旬		
5	51甲寅	翌7旬		
6	01甲子	翌8旬		
6	11甲戌	翌9旬		
6	21甲申	翌10旬		
7	31甲午			
7	41甲辰			
7	51甲寅			
8	01甲子			

卷末表B

文武丁3祀

月	干支	周祭	番号	
8	51甲寅	祭1旬		
8	01甲子	祭2旬		
8	11甲戌	祭3旬		
9	21甲申	祭4旬		
9	31甲午	祭5旬		
9	41甲辰	祭6旬		
10	51甲寅	祭7旬		
10	01甲子	祭8旬		
10	11甲戌	祭9旬		
11	21甲申	祭10旬		
11	31甲午	飫10旬		
11	41甲辰	𠄎10旬	37835	
12	51甲寅	𠄎1旬		
12	01甲子	𠄎2旬		
12	11甲戌	𠄎3旬		
1	21甲申	𠄎4旬		
1	31甲午	𠄎5旬		
1	41甲辰	𠄎6旬		
2	51甲寅	𠄎7旬		
2	01甲子	𠄎8旬		
2	11甲戌	𠄎9旬		
3	21甲申	𠄎10旬		
3	31甲午	翌1旬		
3	41甲辰	翌2旬		
4	51甲寅	翌3旬		
4	01甲子	翌4旬		
4	11甲戌	翌5旬		
5	21甲申	翌6旬		
5	31甲午	翌7旬		
5	41甲辰	翌8旬		
6	51甲寅	翌9旬		
6	01甲子	翌10旬		
6	11甲戌			
7	21甲申			
7	31甲午			
7	41甲辰			

文武丁4祀

月	干支	周祭	番号	
8	51甲寅	●閏旬		
8	01甲子	祭1旬		
8	11甲戌	祭2旬		
9	21甲申	祭3旬		
9	31甲午	祭4旬		
9	41甲辰	祭5旬		
⑩	51甲寅	祭6旬		
⑩	01甲子	祭7旬		
11	11甲戌	祭8旬		
11	21甲申	祭9旬		
11	31甲午	祭10旬		
12	41甲辰	飫10旬		
12	51甲寅	𠄎10旬		
12	01甲子	𠄎1旬		
閏	11甲戌	𠄎2旬		
閏	21甲申	𠄎3旬		
閏	31甲午	𠄎4旬		
1	41甲辰	𠄎5旬		
1	51甲寅	𠄎6旬	35655	
1	01甲子	𠄎7旬		
2	11甲戌	𠄎8旬		
2	21甲申	𠄎9旬		
2	31甲午	𠄎10旬		
3	41甲辰	翌1旬		
3	51甲寅	翌2旬		
3	01甲子	翌3旬		
4	11甲戌	翌4旬		
4	21甲申	翌5旬		
4	31甲午	翌6旬		
5	41甲辰	翌7旬		
5	51甲寅	翌8旬		
5	01甲子	翌9旬		
6	11甲戌	翌10旬		
6	21甲申			
6	31甲午			
7	41甲辰			
7	51甲寅			

卷末表B

文武丁1祀

殷末曆譜の復元

月	干支	周祭	番号	
8	41甲辰	祭1旬		
8	51甲寅	祭2旬		
9	01甲子	祭3旬		
9	11甲戌	祭4旬		
9	21甲申	祭5旬		
10	31甲午	祭6旬		
10	41甲辰	祭7旬		
10	51甲寅	祭8旬		
11	01甲子	祭9旬		
11	11甲戌	祭10旬		
11	21甲申	𠄎10旬		
12	31甲午	𠄎10旬		
12	41甲辰	𠄎1旬		
12	51甲寅	𠄎2旬		
閏	01甲子	𠄎3旬		
閏	11甲戌	𠄎4旬		
閏	21甲申	𠄎5旬		
1	31甲午	𠄎6旬		
1	41甲辰	𠄎7旬		
1	51甲寅	𠄎8旬		
2	01甲子	𠄎9旬		
2	11甲戌	𠄎10旬		
2	21甲申	翌1旬		
3	31甲午	翌2旬		
3	41甲辰	翌3旬		
3	51甲寅	翌4旬		
4	01甲子	翌5旬		
4	11甲戌	翌6旬		
4	21甲申	翌7旬		
5	31甲午	翌8旬		
5	41甲辰	翌9旬		
5	51甲寅	翌10旬		
6	01甲子			
6	11甲戌			
6	21甲申			
7	31甲午			

八九

文武丁2祀

月	干支	周祭	番号	
7	41甲辰	●閏旬		
7	51甲寅	祭1旬		
8	01甲子	祭2旬		
8	11甲戌	祭3旬		
8	21甲申	祭4旬		
9	31甲午	祭5旬		
9	41甲辰	祭6旬	35648	
9	51甲寅	祭7旬	35648	
10	01甲子	祭8旬	35648	
10	11甲戌	祭9旬		
10	21甲申	祭10旬		
11	31甲午	𠄎10旬		
11	41甲辰	𠄎10旬		
11	51甲寅	𠄎1旬		
⑫	01甲子	𠄎2旬		
⑫	11甲戌	𠄎3旬		
1	21甲申	𠄎4旬		
1	31甲午	𠄎5旬		
1	41甲辰	𠄎6旬		
2	51甲寅	𠄎7旬		
2	01甲子	𠄎8旬		
2	11甲戌	𠄎9旬		
3	21甲申	𠄎10旬		
3	31甲午	翌1旬		
3	41甲辰	翌2旬		
4	51甲寅	翌3旬		
4	01甲子	翌4旬		
4	11甲戌	翌5旬		
5	21甲申	翌6旬		
5	31甲午	翌7旬		
5	41甲辰	翌8旬		
6	51甲寅	翌9旬		
6	01甲子	翌10旬		
6	11甲戌			
7	21甲申			
7	31甲午			
7	41甲辰			

— 凡例 —

ゴシック体は年次（祀）を含む記述

丸数字は甲日2回の小月

数字のみは『合集』、aは『合補』、bは『英国』

斜体は誤刻などを修正した片（本文参照）

卷末表B

帝辛3祀

月	干支	周祭	番号		
11	11甲戌	●閏旬	37840		
12	21甲申	祭1旬	37840	35411	
12	31甲午	祭2旬	37840		
12	41甲辰	祭3旬	35529	35411	
1	51甲寅	祭4旬	35529		
1	01甲子	祭5旬		35411	
1	11甲戌	祭6旬	35650		
2	21甲申	祭7旬			
2	31甲午	祭8旬			
2	41甲辰	祭9旬			
3	51甲寅	祭10旬			
3	01甲子	祭11旬			
3	11甲戌	飫11旬		35892	
4	21甲申	𠄎11旬			
4	31甲午	𠄎1旬	35423		
4	41甲辰	𠄎2旬	b2505		35590
5	51甲寅	𠄎3旬	b2505	35892	
5	01甲子	𠄎4旬	b2505		35590
5	11甲戌	𠄎5旬			
6	21甲申	𠄎6旬			35660
6	31甲午	𠄎7旬	37838		
6	41甲辰	𠄎8旬	35756		
7	51甲寅	𠄎9旬	35756		
7	01甲子	𠄎10旬	35756		
7	11甲戌	𠄎11旬			
⑧	21甲申		35756	35398	35660
⑧	31甲午	翌1旬	35756	35398	
9	41甲辰	翌2旬			
9	51甲寅	翌3旬			
9	01甲子	翌4旬			
10	11甲戌	翌5旬			
10	21甲申	翌6旬			
10	31甲午	翌7旬			
11	41甲辰	翌8旬			
11	51甲寅	翌9旬	35883		
11	01甲子	翌10旬	35883		
12	11甲戌	翌11旬	35407		

帝辛4祀

月	干支	周祭	番号
12	21甲申	祭1旬	35407
12	31甲午	祭2旬	
1	41甲辰	祭3旬	35407
1	51甲寅	祭4旬	
1	01甲子	祭5旬	35580
2	11甲戌	祭6旬	
2	21甲申	祭7旬	
2	31甲午	祭8旬	
3	41甲辰	祭9旬	
3	51甲寅	祭10旬	
3	01甲子	祭11旬	
4	11甲戌	飫11旬	
4	21甲申	𠄎11旬	
4	31甲午	●閏旬	a10944
5	41甲辰	𠄎1旬	
5	51甲寅	𠄎2旬	35589
5	01甲子	𠄎3旬	35589
6	11甲戌	𠄎4旬	35589
6	21甲申	𠄎5旬	
6	31甲午	𠄎6旬	35589
7	41甲辰	𠄎7旬	35589
7	51甲寅	𠄎8旬	37839
7	01甲子	𠄎9旬	a11043
8	11甲戌	𠄎10旬	a11043
8	21甲申	𠄎11旬	a11043
8	31甲午		
9	41甲辰	翌1旬	a11043
9	51甲寅	翌2旬	a11043
9	01甲子	翌3旬	
10	11甲戌	翌4旬	35573
10	21甲申	翌5旬	
10	31甲午	翌6旬	35645
11	41甲辰	翌7旬	35645
11	51甲寅	翌8旬	
11	01甲子	翌9旬	
12	11甲戌	翌10旬	
12	21甲申	翌11旬	

卷末表A

番号	祀	月	卜日	祭日	祭祀	対象	備考
合集37839	4	7	—	51甲寅	—	象甲	
合集37840	3	11	10癸酉	11甲戌	—	工典	綴合35529
	—	12	20癸未	21甲申	祭	上甲	
	—	12	—	—	飠	上甲	
合集37843	5	9	—	—	翌衣	—	
合集37844	5	9	—	41甲辰	翌衣	—	
合集37845	—	12	10癸酉	—	—	—	
	—	12	—	—	翌	祖甲	
合集37846	7	5	20癸未	—	飠	祖甲	綴合35422
	7	5	30癸巳	31甲午	—	祖甲	
合集37848	3	10	58辛酉	—	𠂔	—	模擬青銅器
合集37849	8	8	50癸丑	—	—	—	
合集37852	9	2	□亥	—	𠂔	祖乙	12乙亥
合集37855	9	1	—	—	𠂔夕	小甲	同版50癸丑
合集37856	10	10	31甲午	—	—	—	征人方
合集37863	□	9	20癸未	—	—	—	
	—	9	30癸巳	—	—	—	
合集37864	□	3	60癸亥	—	𠂔衣	—	
合集37865	□	3	—	—	𠂔衣	—	
合集37867	—	6	30癸巳	31甲午	—	工典	1旬早い
	□	6	50癸丑	51甲寅	翌	上甲	貞人「泳」
	—	—	10癸酉	11甲戌	翌	大甲	
	—	8	50癸丑	51甲寅	翌	羌甲	
	—	9	10癸酉	—	—	—	
合集38306	—	11	50癸丑	51甲寅	𠂔	工典	
合補10944	4	5	40癸卯	—	□衣	上甲	
合補10945	—	2	50癸丑	51甲寅	—	工典	
	—	3	60癸亥	01甲子	𠂔	上甲	
	—	—	10癸酉	11甲戌	𠂔夕	大乙	
合補10952	—	10	50癸丑	—	祭	上甲	
合補10976	—	—	40癸卯	41甲辰	𠂔	蔑甲	同版十祀又□七月
合補11001	—	12	50癸丑	51甲寅	飠	象甲	
	—	12	60癸亥	01甲子	𠂔	象甲	
	—	12	60癸亥	01甲子	祭	祖甲	
合補11032	—	6	—	—	𠂔	祖甲	
	—	7	60癸亥	—	—	—	
合補11043	—	7	60癸亥	—	—	—	
	—	8	10癸酉	11甲戌	𠂔	祖甲	
	—	8	20癸未	21甲申	—	—	
	—	9	40癸卯	41甲辰	—	—	
	—	9	50癸丑	51甲寅	—	—	
合補11299	6	5	19壬午	—	𠂔	—	模擬青銅器

卷末表 A

番号	祀	月	下日	祭日	祭祀	対象	備考
合集35756	一	6	40癸卯	41甲辰	多	象甲	綴合37838
	一	7	50癸丑	—	—	—	
	一	7	60癸亥	01甲子	多	祖甲	
	一	8	20癸未	21甲申	—	工典	
	一	8	30癸巳	31甲午	翌	上甲	
合集35757	一	8	60癸亥	01甲子	多	象甲	
合集35758	一	—	20癸未	—	—	羌甲	綴合35588・貞人「衡」
	一	—	30癸巳	31甲午	多	象甲	
	一	6	40癸卯	—	—	—	
合集35883	一	1□	50癸丑	—	—	—	「在十月□□」
	一	1□	—	01甲子	翌	祖甲	「在十月□□」
合集35884	一	1	20癸未	21甲申	荔	象甲	綴合35751・貞人「泳」
	一	1	20癸未	21甲申	祭	祖甲	
合集35885	一	2	40癸卯	41甲辰	荔	象甲	
	一	2	40癸卯	41甲辰	祭	祖甲	
	一	2	50癸丑	51甲寅	飠	祖甲	
	一	—	60癸亥	01甲子	荔	祖甲	
合集35886	一	5	10癸酉	—	—	象甲	
	一	5	20癸未	21甲申	荔	象甲	
	一	5	20癸未	21甲申	祭	祖甲	
合集35887	一	5	60癸亥	—	荔	蔑甲	綴合35699
	一	5	60癸亥	—	飠	—	
	一	5	60癸亥	—	—	象甲	
	一	6	20癸未	21甲申	荔	象甲	
	一	6	20癸未	21甲申	祭	祖甲	
	一	6	30癸巳	31甲午	飠	祖甲	
合集35891	一	2	40癸卯	41甲辰	荔	祖甲	貞人「衡」
	一	2	50癸丑	51甲寅	多	工典	
合集35892	一	3	10癸酉	11甲戌	荔	祖甲	綴合38274
	一	5	50癸丑	51甲寅	—	大甲	
合集35893	一	8	50癸丑	—	—	—	
	一	—	—	01甲子	荔	祖甲	
合集35896	一	6	30癸巳	—	多	祖甲	
合集35897	一	11	50癸丑	51甲寅	多	祖甲	
合集36482	10	9	31甲午	—	飠	上甲	征人方・41甲辰の誤刻
合集36509	一	3	—	21甲申	祭	小甲	来征孟方
合集36511	一	10	04丁卯	—	翌	大丁	征孟方
合集36516	一	—	—	41甲辰	荔	祖甲	来征孟方
合集36856	□	9	20癸未	—	—	—	
	一	10	40癸卯	—	—	—	
合集37835	一	12	—	—	多衣	—	2または3祀
合集37836	2	4	20癸未	—	多衣	—	
合集37838	3	6	30癸巳	31甲午	多	羌甲	綴合35756

卷末表 A

番号	祀	月	下日	祭日	祭祀	対象	備考
合集35695	—	11	50癸丑	51甲寅	翌	羌甲	
	—	12	60癸亥	01甲子	翌	象甲	
合集35698	—	7	50癸丑	51甲寅	祭	羌甲	どちらかの月次が誤刻
	—	7	50癸丑	51甲寅	飪	—	
	—	4	—	—	祭	象甲	
合集35699	—	5	50癸丑	51甲寅	飪	羌甲	綴合35887
	—	5	50癸丑	51甲寅	—	羌甲	
合集35700	—	10	10癸酉	11甲戌	飪	羌甲	
	—	10	10癸酉	11甲戌	祭	羌甲	
	—	10	20癸未	21甲申	荔	羌甲	
	—	10	20癸未	21甲申	飪	羌甲	
	—	10	20癸未	21甲申	祭	象甲	
合集35701	—	—	30癸巳	31甲午	祭	羌甲	同版「十月又□」
合集35703	—	10	20癸未	21甲申	彡	羌甲	
合集35706	—	8	50癸丑	51甲寅	彡	羌甲	
	—	8	60癸亥	—	—	—	
	—	8	10癸酉	—	—	—	
	—	9	20癸未	—	—	—	
	—	9	40癸卯	—	—	—	
合集35741	—	2	20癸未	21甲申	翌	象甲	
	—	2	30癸巳	—	—	—	
	—	2	40癸卯	41甲辰	翌	祖甲	
合集35744	—	8	50癸丑	51甲寅	翌	象甲	
合集35745	—	10	60癸亥	01甲子	翌	象甲	11or12月の誤刻
	—	—	20癸未	21甲申	翌	祖甲	
	—	2	60癸亥	01甲子	祭	大甲	
	—	2	20癸未	—	—	—	
合集35748	—	1	20癸未	21甲申	祭	象甲	
	—	1	20癸未	21甲申	荔	—	
	—	1	30癸巳	31甲午	荔	羌甲	
	—	1	30癸巳	31甲午	飪	象甲	
合集35749	—	—	40癸卯	—	—	羌甲	貞人「衡」
	—	3	50癸丑	51甲寅	荔	羌甲	
	—	3	50癸丑	51甲寅	飪	羌甲	
	—	3	50癸丑	51甲寅	祭	象甲	
	—	—	60癸亥	01甲子	飪	象甲	
	—	—	10癸酉	11甲戌	荔	象甲	
合集35751	—	—	10癸酉	11甲戌	祭	祖甲	
	—	1	10癸酉	11甲戌	荔	羌甲	綴合35884・貞人「泳」
合集35752	—	—	10癸酉	11甲戌	飪	象甲	
	—	—	10癸酉	11甲戌	荔	羌甲	綴合35653
	—	1	20癸未	—	—	—	

卷末表A

番号	祀	月	下日	祭日	祭祀	対象	備考
合集35589	—	5	50癸丑	—	—	—	
	—	5	60癸亥	01甲子	𠂔	—	
	—	6	10癸酉	11甲戌	𠂔	小甲	
	—	6	30癸巳	31甲午	𠂔	𡇗甲	
	—	7	40癸卯	41甲辰	𠂔	𡇗甲	
合集35590	—	4	40癸卯	—	—	—	
	—	5	60癸亥	01甲子	𠂔	小甲	
合集35641	—	8	50癸丑	—	—	—	
	—	9	60癸亥	—	—	—	
	—	9	10癸酉	11甲戌	翌	𡇗甲	
	—	9	20癸未	21甲申	翌	𡇗甲	
合集35644	—	9	10癸酉	11甲戌	翌	𡇗甲	
	—	9	20癸未	21甲申	翌	𡇗甲	
	—	9	30癸巳	31甲午	翌	象甲	
	—	10	40癸卯	—	—	—	
合集35645	—	10	30癸巳	—	翌	𡇗甲	貞人「衡」
	—	10	40癸卯	41甲辰	—	𡇗甲	
合集35646	—	11	20癸未	—	—	—	
	—	11	30癸巳	—	—	—	
	—	12	40癸卯	41甲辰	翌	𡇗甲	
	—	—	—	—	翌	小甲	習刻または補遺
合集35647	—	11	—	41甲辰	翌	𡇗甲	「□□又一」
合集35648	—	—	40癸卯	—	祭	𡇗甲	
	—	—	40癸卯	—	𡇗	小甲	
	—	9	50癸丑	—	𡇗	𡇗甲	
	—	9	50癸丑	—	祭	𡇗甲	
	—	10	60癸亥	01甲子	𡇗	𡇗甲	
	—	10	60癸亥	01甲子	𡇗	𡇗甲	
合集35649	—	10	—	01甲子	祭	𡇗甲	
合集35650	—	1	10癸酉	11甲戌	祭	𡇗甲	
合集35653	—	12	50癸丑	51甲寅	𡇗	𡇗甲	綴合35752
	—	12	50癸丑	51甲寅	祭	𡇗甲	
合集35655	—	1	—	51甲寅	𠂔	𡇗甲	12787同片
合集35656	—	—	50癸丑	51甲寅	𠂔	𡇗甲	
	—	4	60癸亥	01甲子	𠂔	𡇗甲	
合集35657	—	4	50癸丑	51甲寅	𠂔	𡇗甲	貞人「衡」
	—	5	60癸亥	01甲子	𠂔	𡇗甲	
合集35659	—	5	10癸酉	11甲戌	𠂔	𡇗甲	
合集35660	—	5	20癸未	21甲申	𠂔	𡇗甲	
	—	—	20癸未	21甲申	翌	工典	
合集35662	—	10	10癸酉	11甲戌	𠂔	𡇗甲	
合集35693	—	1	—	01甲子	翌	𡇗甲	
合集35694	—	10	20癸未	21甲申	翌	𡇗甲	

卷末表 A

殷末曆譜の復元

番号	祀	月	卜日	祭日	祭祀	対象	備考
合集35528	—	10	—	51甲寅	荔	上甲	
	—	10	—	51甲寅	祭	大甲	
合集35529	—	12	40癸卯	41甲辰	荔	上甲	綴合37840
	—	12	40癸卯	41甲辰	祭	大甲	
	—	1	50癸丑	51甲寅	飠	大甲	
	—	1	50癸丑	51甲寅	祭	小甲	
合集35530	—	12	20癸未	21甲申	—	上甲	
	—	12	30癸巳	31甲午	荔	上甲	
	—	12	30癸巳	31甲午	祭	大甲	
	—	12	40癸卯	41甲辰	飠	大甲	
	—	12	40癸卯	41甲辰	祭	小甲	
	—	1	50癸丑	51甲寅	荔	大甲	
	—	1	50癸丑	51甲寅	飠	小甲	
	—	1	60癸亥	—	荔	—	
合集35532	—	3	20癸未	—	飠	大甲	
	—	4	30癸巳	—	—	—	綴合35424
	—	4	40癸卯	41甲辰	彡	大甲	
	—	4	50癸丑	51甲寅	彡	小甲	
合集35534	—	5	60癸亥	—	—	—	
	—	10	10癸酉	11甲戌	翌	小甲	
合集35573	—	12	30癸巳	31甲午	翌	—	
	—	12	40癸卯	41甲辰	翌	小甲	
	—	12	50癸丑	—	—	—	
	—	1	60癸亥	01甲子	翌	—	
合集35574	—	4	30癸巳	—	—	小甲	
	—	4	40癸卯	41甲辰	荔	大甲	
	—	4	40癸卯	41甲辰	飠	小甲	
	—	—	50癸丑	51甲寅	祭	蔑甲	
	—	—	50癸丑	51甲寅	—	小甲	
合集35576	—	1	60癸亥	—	—	大甲	
	—	1	60癸亥	—	飠	小甲	
合集35580	—	2	20癸未	21甲申	飠	小甲	
	—	3	30癸巳	31甲午	祭	蔑甲	
	—	3	40癸卯	41甲辰	飠	蔑甲	
	—	3	40癸卯	41甲辰	祭	蔑甲	
合集35581	—	—	—	—	荔	大甲	習刻または補遺
	—	—	—	—	荔	小甲	習刻または補遺
	—	4	40癸卯	41甲辰	荔	大甲	
	—	4	40癸卯	41甲辰	飠	小甲	
合集35582	—	5	10癸酉	11甲戌	祭	象甲	
	—	5	10癸酉	11甲戌	飠	—	
合集35586	—	4	30癸巳	31甲午	彡	小甲	
合集35588	—	5	50癸丑	51甲寅	彡	小甲	綴合35758・貞人「衡」

九五

卷末表 A

番号	祀	月	下日	祭日	祭祀	対象	備考
合集35397	—	7	10癸酉	11甲戌	翌	上甲	
合集35398	—	8	20癸未	21甲申	—	工典	
	—	8	30癸巳	31甲午	翌	上甲	
合集35399	—	9	30癸巳	—	—	—	
	—	9	40癸卯	41甲辰	翌	工典	
	—	9	50癸丑	51甲寅	翌	上甲	
合集35400	—	—	10癸酉	—	翌	上甲	綴合38307
	—	4	20癸未	—	—	—	
	—	5	30癸巳	31甲午	翌	大甲	
合集35401	—	9	40癸卯	—	翌	工典	
	—	10	—	—	—	上甲	
合集35402	—	—	50癸丑	51甲寅	翌	—	貞人「衡」
	—	10	60癸亥	—	—	—	
	—	10	10癸酉	11甲戌	翌	大甲	
	—	10	20癸未	21甲申	翌	小甲	
合集35407	—	12	10癸酉	11甲戌	—	工典	
	—	1□	—	—	祭	上甲	「十月□□」
	—	1	—	—	嘉	上甲	
	—	1	—	—	祭	大甲	
合集35409	—	—	—	41甲辰	祭	上甲	同版正月・綴合35416
合集35410	—	3	60癸亥	01甲子	祭	上甲	
合集35411	—	11	20癸未	21甲申	祭	上甲	
	—	1□	40癸卯	—	—	—	「十月□□」
	—	1	60癸亥	01甲子	飠	—	
	—	1	60癸亥	01甲子	—	大甲	
合集35412	—	12	30癸巳	31甲午	祭	上甲	
	—	1	—	41甲辰	嘉	工典	
	—	1	—	41甲辰	—	上甲	
合集35414	—	11	10癸酉	11甲戌	祭	上甲	
合集35416	—	1	50癸丑	51甲寅	飠	上甲	綴合35409・貞人「ム」
	—	2	10癸酉	11甲戌	飠	大甲	「月二」は二月の誤刻
合集35417	—	9	40癸卯	41甲辰	飠	上甲	
合集35422	—	5	40癸卯	41甲辰	—	工典	綴合37846
	—	6	50癸丑	51甲寅	多	上甲	
	—	6	60癸亥	01甲子	多夕	大乙	
合集35423	—	4	30癸巳	31甲午	多	上甲	綴合b2505
合集35424	—	3	20癸未	21甲申	多	上甲	綴合35534
合集35425	—	1	41甲辰	—	多	上甲	
合集35524	—	7	10癸酉	—	翌	大甲	
合集35525	—	11	20癸未	21甲申	翌	大甲	
合集35527	—	8	20癸未	—	—	—	綴合37941（第1条）
	—	9	30癸巳	31甲午	嘉	上甲	
	—	9	30癸巳	31甲午	祭	大甲	
	—	9	—	—	飠	大甲	